けた處がなかつたので、そこを通つて川を溯つた。グリゴーリイは五匹の犬を曳いてゐたが、その中に全體の指導者格で、ズメイカも混じつてゐた。全部の犬は、年齢、種類、性質に關係なく、ズメイカに絶對に服從してゐた。

パボーシンはズメイカを「女部隊長」と呼んでゐたが、まつたくその呼名に適はしく、專制的に、いはゆる是非善惡に拘らず、自分の部下に命令してゐた。一寸言ふことを聽かないと、彼女の壓迫やテロルを受け、酷い目に遭はされるか、少くとも威嚇するやうに吠えつかれるのだつた。

ズメイカはいつも先頭に立つて、他の犬が自分より前へ出るのを許さなかつた。もし野獸を追うてゐる時にそんなことでもあつたら、ズメイカは、その反逆者に飛びかかつて、鋭い狼のやうな齒で嚙みついて懲しめた。ズメイカの母親は牝狼であつたので、ズメイカの性質も荒々しく狷介なところがあつた。仲間の畜犬の間で、野性の先祖なる赤狼の掟と規則を實行してゐたのだ。

獵師に取つて、この犬は、この上もない價値を持つてゐた。といふのは、もしこの犬がゐな

いと、犬群は仲よく働くことが出來ないし、それぞれ自分勝手な行動をとつて、野獸を待ち伏せたり、飛びかかつたりする全體の計畫に從はないからだ。ズメイカは保護色を持つてゐた。畜生した毛皮の白い色は、完全に雪と融け合つてしまひ、三角形をなす二つの黑い眼と鼻だけが、やつとその所在を示してゐた。外の犬はまちまちの犬で、自分らの「女部隊長」の指揮の下に立派に働いた。

最も驚くべき點は、ズメイカの二倍も大きな犬や、ズメイカより力の強い犬がゐたのだが、それがみんなズメイカの絶對權威を認めて、全く服從してゐたことである。

小屋を出るとすぐ、今日の獵の目的は何であるか、ズメイカは悟つた。といふのは、グリゴーリイが犬の革紐を曳いて出かけるのは虎狩の時に限つてゐて、その外の場合は、犬を先へ放して、獸を搜索させ追跡させたからである。

ズメイカはそれに從つて、道にしるされてある他のけだものの足跡に犬たちが氣を取られることを禁じ、言ふことに從はない犬を罰した。

朝鮮松の林には、虎の足跡はなかつた。それで二人は、樅や松の茂つた枝の上で敏捷な栗鼠

を追掛け廻してゐた黒貂の新しい足跡に、たびたび出遭つたが、立ち止らないで、大急ぎで陰氣な森を拔けた。グリゴーリイはこの邊に黒貂の係蹄を仕掛けて置いたのだが、今はそれどころではなく、もつと收益の多い、重大な同時に危險な獵を目前に控へてゐたからだつた。

夫婦の間には妙に話がはづまなかつた。ナスチヤは後から歩いたが、始終遲れ勝ちで、それがためグリゴーリイは立ち停まつて、妻を待つてゐなければならなかつた。これが彼の氣持を焦々させたらしいが、別に何とも口に出して言はず、ナスチヤが山のやうな雪を攀ぢ登つて、頑强にあらゆる障碍を乘り越える樣子を、默つて見てゐた。彼女にしてみると、良人の後に跟いて行くのは困難だつたが、良人が待ちくたびれて、彼女を一人殘して先へ行つて了ふのを恐れたので、辛抱强く前進して行つた。彼女はもう力盡きてゐたのだが、弱味を見せたくなかつたし、助けを求めたくなかつたので、雄々しく彼に跟いて行つたのだ。

二時間ばかり經つと、二人は山の上に出た。そこへ達する前に、ズメイカが落著かなくなつて、尖つた耳は用心深く立ち、鋭敏な鼻はピクピク蠢きながら冷たい空氣を吸ひこんだ。

ナスチヤが近づくのを待つてグリゴーリイは言つた。

「ズメイカが獸を嗅ぎつけたんだ！　山の上へこれから行つて見よう。虎の足跡があるだらうと思ふ。銃を調べてみろ！　相手は遠くないぞ！」

ズメイカの紐を曳つぱつて駈け出した。犬の群はそれにつづいた。

恰度山の背の、小石混じりの砂の上に、巨大な猫の圓い足跡があつた。仔をつれた牝虎のものである。

足跡を檢べて、手で觸つたりして、グリゴーリイは妻を顧みて注意した。

「四時間ほど前に、仔をつれた牝虎が、此處を通過してゐる。牝虎は、下の方に見える支脈の寢場所へ仔を連れて行つたんだ。向ふの胡桃林の日當りのいい丘に隱れてゐるだらう。俺は犬を放して跟いて行くから、君は、來たけりや俺の後から來い。だが、俺より先へ出ちや困る。ゆつくり歩いて、耳を澄ましてゐてくれ。一時間經たぬうちに犬が發見して吠えるから、その時急いで駈けつけるんだ。但し氣をつけてやつてくることだな！」かう言つて、グリゴーリイは革紐ごと犬を放し、その後から虎の足跡を辿つて行つた。

獨りになつたナスチヤは、深い雪や倒れた木を越えたりして酷く疲れてゐたので、一休みし

ようと石の上に腰をおろした。

しばらく休息した彼女は、グリゴーリイの足跡を拾つてまた歩き出した。最初は山の背傳ひに、やがて峠を越え、勾配に沿うて。この傾斜面には野猪の足跡の古いのや新しいのや、團栗が無數に落ちてゐる樫の老木の根元にある休息場所や穴などが、眼についた。この邊には雪が少かつたので、彼女は失つた時間を取り戻さうとして急いだ。

あたりはしーんとしてゐた。ただ啄木鳥が堅い嘴で枯木をつついて密林の靜けさを破つてゐた。

彼女は良人に追ひ付かうと思つて、山の上で切り取つた木の枝をついて、走るやうにして急いだ。杖の力を借りて、草叢や石や倒れた木などを飛び越して、大股で歩いた。汗は胸の下から流れたが、拭く間もなく、グリゴーリイがきめた時間が迫つてゐるので、急がねばならなかつた。

そのとき、何處か遠くの方で、犬の吠える聲がした！「あれは、ズメイカだ！」と彼女はチラと考へて、足を速めた。

ズメイカにつゞいて、他の犬も吠え始め、それが氣を揃へた合唱になつて森と山の靜けさを破つた。遠くの方で次ぎ次ぎに木靈を生んだ。

時が時なので、ナスターシヤの頭に新しい想念が群がり、心に不安が忍び込んだ。良人が犬の後を追うて出かける間際に、最後に彼女を見た眼の表情を、ふッと思ひ出した。いつであつたか、短かつた幸福な時代に彼女を見てゐたあの眼差と同じものを見たのである。グリゴーリイが自分の許へ再び歸つてきた、自分の愛が完全に永久に彼を征服した、といふ氣がした。良人の身に非常な危險が迫つてゐるのを知つて、彼女は急いだ。

犬の聲に耳を傾けて、虎はいま包圍され、グリゴーリイはこれから犬と一緒に虎と鬪ひ始めるところだ、といふことを知つた。

彼女は最後の力を絞つて、足許に横はる倒木、岩、深い雪などの障碍に注意も拂はず驅け出し、木の枝に腕を叩きつけ、岩角に膝をぶつつけて倒れ、また起き上つて、胸の中で震へてゐる心臟の激動のままに驅け出すのであつた。

樫が疎らに生えてゐる小丘を登ると、目の下の深い低地の、茂つた胡桃藪の中でちらついて

ゐる犬の姿が、彼女の眼に映つた。けたたましい犬の吠える聲と、咆哮に變つてゆく鈍い虎の唸り聲が聞えた。まさしく犬が攻撃して、虎は防禦してゐるところだつた。その近くにグリゴーリィの高い姿が黒ずんでゐた。

彼女のところから爭鬪の場所までは、二百歩よりなかつただらう。が、眼の前には野生の葡萄が茂り、深い雪に覆はれた深い谷が口を開けてゐた。彼女はいくらも思案せずに谷へ飛び込んで、向ふの崖へ達しようと、異常な努力をつひやした。

グリゴーリィは、虎に近づいてくる彼女を見て、

「ナスチヤ！　そばへ寄るな！　犬に仔虎を攻撃させておけ！　牝虎の方は君と俺の間にゐる！」

と叫びながら彼女の方へ急いだ。

彼女は苦しさうに息をつきながら立ち止つた。やうやく脚で立つてゐられた。

この瞬間だつた。人間が近づいて來るのを認めた牝虎は、茂みにかくれて人間の横手へ廻り、不意に飛びついて、體全體の重さで押し倒した。前脚の一撃は非常に猛烈で、グリゴーリィは

ばつたり雪の中に倒れてしまつた。これはナスターシヤの面前で起つたのである。

愛する人の倒れるのを見たナスターシヤは、我を忘れて發砲した。銃聲が轟いた。それと同時に、犬に追ひ詰められた仔虎の哀れつぽい鳴き聲が聞えた。牝虎が己れの犧牲を放棄して仔虎を救ひに駈けつけるためには、この鳴き聲で十分だつた。

彼女の發砲は無駄で、當らなかつた。興奮と疲勞のために手が震へて、思ふやうにならなかつたのだ。

彼女は無我夢中だつた。グリゴーリィの處へ飛んで行つて、グリゴーリィを仰けに引くり返して顏を覗きながら叫んだ。

「グリゴーリイ！　確りして！　あたし此處にゐます。ナスチヤです！　聞える？」

しかし、グリゴーリィはこの言葉を聞くことが出來なかつた。すでに死體になつてゐたからである。

牝虎は彼を地上に倒してから、恐るべき牙で頭を碎いたのだつた。

彼女は彼の死を信じる氣になれず、彼の頭をゆすりながら、絶望のうちに繰りかへした。

「グリゴーリイ！　グリゴーリイ！　しつかりして！」

だが、グリゴーリイは無言で、動かなかつた。心臟の鼓動は止まり、力ない黑い眼は、上の青空を凝視めたままだつた。青空は、地上の悲しみや喜びには無關心に、冷やかに見下してゐた。

この時分、仔虎を守護しながら犬を片づけた牝虎は、怪我のなかつた仔虎を密林の奥へ連れ去つた。

良人の死をやうやく確信した彼女は、冷たくなつてゆく彼の身體を兩手で抱いて、自分の頭を死體の胸に押しつけた。

このとき彼女が何を考へてゐたか、それは神のみがしろしめす。彼女の悲しみは名狀し難いものであつた。

そのままの狀態が、しばらく續いた。彼女は寒さも感じなかつたし、何が起つたかも、はつきり判らなかつた。

おもむろに顏を擡げて、死んではゐるものの、やはり美しい良人の顏を見た彼女は、肩先から突き出てゐる獵銃に眼を移した。恐ろしい想念が電光のやうに腦裡を掠めた。死なう！　といふ想ひだつた！——愛する人が亡くなつて、何の生甲斐があらうか！

彼女は安全裝置を外づしてある獵銃を手にすると、銃口を自分の顳顬に當てて、曳金を指で探つて、力を込めて曳いた……が發射しなかつた！　そこで、二本の指を掛けて、もつと力を入れて締めにかかつた——突然、彼女は聲を擧げて我に返つた……何だか溫かくて柔かいものが頰に觸れ、熱い息が顏に掛つたのだ……

眼の前にズメイカが立つてゐた。

犬は牝虎のために横腹に傷を負うてゐた。虎の爪の一擊は、ただ犬の皮を引裂いただけだつたが、腹一面が血塗れになつた。それで、ズメイカは草叢の傍に寢そべつて、傷口を舐めるのに懸命になつてゐたので、その間の出來事を知らなかつた。自分の仲間がみんな斃されたのを見て居り、自分の主人を搜しに行かねばならなかつたのだが、灼きつくやうな傷の痛みで、血を止めるために舐めざるを得なかつたのだ。

鬪爭の後にやつてきた靜寂に、犬は我に返つた。頭をあげて耳を澄ました。何處か近くで、

自分の主人の名を呼ぶ聲がした。で、耳をキッと欹てたが、何だか變なことが起つたぞ、と本能が囁いた。

ズメイカは痛みを怺へて立ち上り、聲のする方へ歩き出した。

自分の女主人を見ると、傍へ寄つて、熱心に顏や頭を舐めはじめ、おのれの忠實さと愛情を示した。

これが、ナスターシヤを救つたのである。

犬を凝ツと見、限りない愛情と同情に充ちたその慧しげな眼と視線が合ふと、彼女はハツと我に返り、獵銃を脇へ投げ棄てて立ち上つた。ズメイカはなほも甘えて、怪我してゐない方の脇腹を彼女の膝にすり寄せた。

「ズメイカ！　あたしの大事なズメイカ！」彼女は忠實な犬の賢い頭を撫でながら言つた。「ねえ、グリゴーリイはあたし達の傍から行つて了つて、もう歸つて來ないんだよ！　どうしたら好いだらう！　これも神様の思召しでせう！　もしお前が居なかつたら、あたしは自殺したかも知れない！　でも、もう死にやしない！　もう濟んで了つたのよ！　辛いけど、ねえズメイカ。生れてくる子供のために生きて行かなけりや、ねえ！　有難う、お禮言ふわ！」

犬とこんなことを語りながらナスターシヤは、自分の絶望的な寂寥と悲哀を紛らはさうと努めた。しかし彼女の神經は、たうとう持ちこたへられなくなつた。犬の傍の雪の中に坐りこんで犬を抱いて、頭に接吻しながら、涙を流した。ズメイカの方では、彼女の眼や耳を舐めようと努めて、それに應へた。彼女は身體を震はして歔欷り泣いた。密林と青空の外に、これを見てゐる者はなく、明るい太陽はいきいきとした暑い光を投げ、彼女の蒼白い頰をつとうて雪の上に落ちる涙の滴を、きらりと光らせた。

それから永い間、犬と人とは抱き合つたまま坐つてゐた。密林のギヤング、狼の群が、容易に手に入る獲物と死體を嗅ぎつけて、すぐ近くまで忍び寄つたのに氣も付かなかつた。

最初に氣が付いたのはズメイカで、その鋭敏な嗅覺は、野獸共がやつて來る方角を敎へた。犬はキッとなつた。背中の毛並は逆立ち、今まで優しかつた眼は、憎々しげに光つた。

ナスチヤはすつかり我に返つて、銃を執ると、狼の唸り聲のする方へ歩いて行つた。

胡桃の藪を抜けると、あまり遠くない處でうづくまつて、ご馳走を待つてゐる森の匪賊の一

圖が眼に映つた。

彼女が一發撃つただけで『灰色の友人』の一群は、その場を離れて、後も見ないで逃げて行つた。ズメイカはその後姿を見て、意地悪さうな唸り聲で、野生の自分の親類を見送つた。爭鬪の跡に引き返したナスチヤは、牝虎のために片輪にされた犬を、いちいち廻つてみたが、一匹として生きてゐるものはなかつた。仔虎を護る憤怒の牝虎の、恐るべき脚の打撃で、みんな斃されたのだ。

ナスチヤは、愛する人を殺した牝虎に對して憎悪を抱いてゐなかつた。彼女は『密林の掟』をよく理解してゐたし、野獸にとつて生くるための殘忍な鬪ひが正當であるのを知つてゐたのである。

彼女は良人の死體に近づいて、その眞上で頸垂れて祈つた。そして明るい太陽に照らされてゐる空に、澄んだ瞳を向けて、人生の祕密と『來世』の謎の世界を見つけようと懸命だつた。そして、姿のない愛人の靈魂が自分の身近かにあることを、全存在をもつて感じ、彼女の魂はその方へ力强く引かれて行くのだつた。

その間ズメイカは主人の氣持を感知し、その氣持を亂すまいとして、死體を嗅いでから向ふの方へ退き、雪の上に坐つて、低い、哀れつぽい聲で唸つた。それで自分の悲しみを表現したのである。

「ズメイカ！　お止し！」彼女は惱ましい考へから遠退いて言つた。「お前は餘計あたしを苦しめる！　それよりは家へ歸つて、この悲しみをパボーシンに傳へて頂戴！　あたしの言ふことが解る？　さあ、早く行つておいで！　時間がどんどん經つて、すぐ夜になるから」

ズメイカは唸るのをやめてナスチヤの傍に寄り、彼女の言つた言葉の意味を理解しようと努めながら、彼女の眼を見てゐる。彼女が頭を輕く叩いて家の方角を指差したとき、ズメイカは事の樣子をすぐ呑みこんで、尾を振りながら歩き出したが、やがて速足になり、二十露里（五里）近くある小屋をさして、まつしぐらに駈け出した。

「まあ宜かつた！」とナスターシヤは考へた。「夕方までに此處にパボーシンがやつてくる。朝になつたらグリゴーリイを小屋へ運ぶことが出來る！　ただ途中でズメイカが狼に襲はれね

ばいいが！　さうなれば、あたしが出掛けて行く。狼に悪戯されないやうに、倒木や石でグリゴーリイの死體を圍つて！」

ナスチヤはさう思案しながら焚火をおこし、良人の死體の傍で、物思ひに沈んだ。そして、またも狼が彼女の周圍に集まつて、藪の奥で綠色の眼がぎらぎら光つてゐるのに、彼女は氣が付かなかつた。

×

「バボーシカ、起きろ！」私は足を搡つて、ぐつすり寢込んでゐる友を起した。「メズイカが走つて戻つた！　血だらけになつてる！」

私がこれだけ言ふと、バボーシンはばッと飛び起きて、眼を擦りながら叫んだ。

「そんな馬鹿な！　何處だ？　問題だぞ、そいつは！」

さう言ひながらわれわれは小屋の外へ出た。すると入口の處で、ズメイカが飛びついて嬉しさうにくんくん鳴いた。

左の腹は血みどろで、脚に深い切り傷があつた。

「ズメイカ！一體どうして駈けてきたんだ？」バボーシンは傷口を調べながら訊ねた。「主人たちは何處に居るんだ？　ふむ！　この傷は虎の爪の痕だな、一ト目で判る！　場所は何處だ？」

ズメイカは注意深く聽いて居たが、バボーシンの手を振り切つた。

彼が前へ出ると、さも後から跟いて來てくれ、と言はぬばかりに向ふへ駈けて、行くべき方角を示しながら吠えた。

「おや！」犬をじッと見てゐたバボーシンが言つた。「どうも變だぞ！　何かあつたんだな！　馬の用意をせにやならんぞ！　こいつが駈け戻つたのには譯があるんだぞ！　それにこの傷だ！　みんな虎に引ッ搔かれたに違ひない！」

「俺は橇の用意をするから、君はこんな場合に必要と思はれる用意をしといてくれ！　一刻の猶豫も出來ん！」

バボーシンが馬を曳き出して馬具をつけてゐると、ズメイカは安心して、橇の上に坐つて、これで何もかも都合よく行きますよ、とわれわれに教へながら、出發を待つてゐた。

「どうだい、實に利口なもんだな！」バボーシンは橇をつけ終つて、出發と野宿に必要なものをみんな橇に積み込みながら言つた。

「ただ口を利かないだけだ！　ところで、もう晩いから向ふで泊ることにならうから、毛皮外套に毛皮が要るな」

すつかり積み終ると、バボーシンが言つた。

「さあ行つてらつしやい、バボーシンとな」そして馭者臺に腰をおろして、馬に聲を掛けた。

ズメイカは先頭に走つて、橇の通れる道を拾ひながら道案内し、馬にとつて大きな障碍のない場所を走つた。先きへ進めなくなつてバボーシンがズメイカの方を向いて「ここは通れないぜ、外の道を探してくれ！」と言ふと、利口な犬は方向を變へて、來る時の自分の足跡をまた見つけるのだつた。

四時間ぐらゐ經つて、道案内の犬の後について行つたバボーシンは、やつと現場についた。途中で、何べんとなく橇が藪を突破したり、馬の手綱をとつて曳つぱらねばならなかつたが、特に北側の山腹の嶮しい坂道がさうだつた。此處は、雪融けが凍つて堅い殼となつて雪堆を覆

つてゐた。

ナスターシヤは、バボーシンが近づいてくるのを、遠くから聞いてゐた。それは彼の聲は眞鍮のラツパのやうに響いて、森の靜けさを破り、峽谷に反響を呼んでゐたからだつた。

ズメイカは先きへ駈け出して、ナスチヤの顏を見ると、彼女の顏を舐めようとして肩先に飛びついた。

「ほんとに、來て頂いて、助かつたわ！」バボーシンが馬を停めて、挨拶しながら近づいたとき、彼女は聲を掛けた。

「それで、グリゴーリイは？」友の姿を眼で探しながら彼は訊ねた。

「あの、あそこに寢てゐますわ？」と彼女は答へて、悲しみを見せまいとして、顏をそむけた。

「寢込んででもゐるのか？」彼女の手を離さずに訊ねた。

「ええ、眠つてますの！」やつと涙を怺へて、彼女は低い聲で言つた。「そして、その儘もう眼を覺しませんわ！　牝虎に殺されたのです！」

この報せに愕然としてバボーシンは、ナスチヤの顏を凝ッと見詰めた。彼女は咽喉まで込み

あげてきたものを怺へることが出來ず、兩手で顏を覆うて烈しくすすり泣いた。

　バボーシンは周圍を見廻してグリゴーリイを認めると、それに近づいて膝をつき、彼の頭に手をのせて、深い思ひに沈んでゐるボーズのままで動かなかつたが、風雨に暴された肉桂いろの頬を大粒の涙がつたうて、ぽたぽた雪の上に落ちた。

　彼は無言だつた。四方から迫つてくる陰氣で無愛想な密林も無言だつた。空を支へてゐる巨大な山も默してゐた。ただ、近くの獲物を嗅ぎつけた赤狼の哀しげな遠吠えが、遙かに聞えるだけだつた。

　馬までが、耳だけ動かして飢ゑた狼の唄を聽きながら、立つたまま身動きもしなかつた。

　ズメイカはナスチヤの足許にうづくまつて、犬相當のことを思ひ惱みながら、彼女の眼を見上げてゐた。

　近くの朝鮮松林で啄木鳥が木を突つき、ジエルナ（啄木鳥の一種）の哀れつぽい聲が、樅の古木の梢で忙しくひびいた。

　たそがれてきた。太陽はベイダヤンの支脈に隱れ、長い影が山の斜面や峽谷に引き延ばされ

た。

　遠くで大ミミヅクが唸り、北極梟の高笑ひがそれに應へ、峽谷の上で腹のすいた山猫がニヤオと鳴いた。

　寒さが加はつた。疲れた馬は落着かなくなつてきた。

　バボーシンは起ち上つて友の屍に十字を切つて、ナスチヤに近よつた。

「ナスターシヤ！」彼女の手を執つて、燃えてゐる焚火の傍へ導いて言つた。「泣かないで、しつかりするんだ！　涙で彼を起す事は出來まい。仕方のない事だ！　神樣の思召しと思ふんだね！　諦めた方がいい！　神樣の思召しでなけりや、髮の毛一本だつて頭から落ちつこないんだからね。それよりか、これから先きの事を考へようぢやないか！」

「諦めてます、アキンヂン！　（バボーシンの名）」

　ナスチヤは焚火のそばの丸太に腰をおろして、濡れた顏をハンケチで拭きながら答へた。

「でも、自分で自分がどうにもならず、涙が獨りでに流れてくるんです！　あの人、あたしを裏切つて離れて行つたけれど、やつぱりあたし、愛してゐたんですもの……いづれそのうちに

あたしの處に歸つてくるツて知つてました。あたしがあの人を殺したやうなものですわ。だつて、あの人があたしに注意しようとして、そつちに氣を取られて、牝虎が近づくのに氣が付かなかつたんですもの、もしあたしが跟いて行かなけや、いま生きてゐるでせうに。これが一層あたしを苦しめて居たたまれない氣持ですの。あの人が死んだのはあたしのせゐなんです！」

「ナスターシヤ、莫迦なことを言つちやいかん」古い狩獵家は自分のパイプに火を點けて、反對した。「何も君のせゐぢやない！　のがれぬ運命だつたんだ！　君が居なくたつて牝虎に殺されただらうと、俺は思つてる。誰も神樣のやうにはいかんからね！　つまるところ、ああなるべきだつたんだ！　われわれ哀れむべき人間は、誰にしたつて、己れに與へられた運命を全然知らないし、變へる力もないんだ！　それよりもこれからどうして生きて行く積りか、そいつを話してくれないか。君は兩親があるから、そつちへ行つてもいいしそれとも獨りで暮すか、といつて何處で？　何處か外の處でか？　ここにゐたつて、グリゴーリイがゐなけりや、仕方がないだらう？」

　かう言つて、パボーシンは相手を見た。

「あたし、そんなこと、まだ考へてませんわ！」火の上に湯沸しを掛けながら、彼女は答へた。「口に言へないほど、悲しいんです！　すぐにでも死んでしまひたいんです！　これから先どうするかツて？　いまは生きてゐるのが嫌だし、慰めてくれるものが何もないんです！　これから何うなるか。それは判らないけれど、何れにしても親の處へは歸りません。獨りでも暮して行けます。グリゴーリイが預金を少からず殘しておいてくれましたから、しばらくは十分です。それからは何とかなると思ひます。いまそんなことは考へられません！」

　そんなことを言つてから彼女は兩手で頭を支へて、赤味がかつた明りを周圍に投げてゐる明るい焚火の炎を見詰めながら、思ひに沈んだ。

　早くも暗くなつて、眠りについた大地の上に帳をおろしてゐる暗い空の底で、星がきらきら燦めき出した。

　橇からはづされて馬衣で覆はれた馬は、橇の傍に立つたまま眠つてゐたが、をりをり身震ひして脚を代へた。ズメイカも焚火の傍で身體を圓め、鼻を兩脚の間に突込んだままうづくまつてゐた。

パボーシンは、橇の傍で、熊の皮と鹿の皮で、彼女のために温かい寝床を用意しようと、しきりにごそごそやつてゐたが、やがて、料理に取り掛り、野猪の仔の腿肉を鐵串に刺して焼き、彼女に晩の食事をしないか、と勸めてから言つた。

「さあ、ナスターシヤ・イワノーウナ様！　どうぞ食卓におつき下さい！　人はパンのみにて生くる能はず、とやら申しますが、私はパンだけでなく、頬ツぺたの落ちさうな焼肉まで差し上げませう！　十分にお泣きなされましたから、こんどは召上る番でございます！」

彼が喜劇めいた調子でかう言つたので、彼女もつい微笑を浮べない譯には行かなかつた。

「さあ、おあがり、おあがり。ナスターシヤ！」古い密林男は、汁の垂れる熱い肉を一トきれ彼女の手に持たせて勸めた。「一生泣いても居れまい。食べなきや生きて居れんぞ」

ズメイカは美味い焼肉の匂ひを嗅いで、焚火の側へ寄つてきて、パボーシンの顔を甘えるやうに見ながら尾を振つた。

「ほう、お前も仔猪の肉を試食したいのか？」と犬に訊ねた。「よし、それ！　今日のお前の働きは、奢つてやる値打があるよ！　お前がなかつたら、ナスチヤはめツからなかつたらうからなア！　さあ、食へ、食へ。可愛い奴！」

彼はこんな風に話したり、ふざけたりして、ナスターシヤの暗い想ひを紛らはさうと努めた。それを聞いた彼女の沈痛な顔に、見るも悲しげな微笑が浮びでた。

パボーシンに是非、と言はれてラム酒入りの熱い茶を飲み、食事をした彼女は、橇の上に横はり、毛皮の夜著を被ると靜かになつたが、この夜、彼女が眠れたかどうかは判らない。

パボーシンは野營場所の見張りや、彼女の安全守護で一睡もしなかつた。

彼はズメイカを連れてその邊を巡回した。山猫のやうな彼の眼は暗の中でハツキリ見え、鋭敏な耳は密林の峡谷に起つたどんな微かな物音でも聽き遁さなかつた。

このやうな巡回の時だつたが、先頭に走つてゐたズメイカが、ふと立ち停つてパボーシンを待ち受けて、不安と恐怖を表はしながら唸つた。前へ進み出たパボーシンは、胡桃の藪の中を滑つて行く長い影を認めた。何か大きな野獸が、馬の臭ひと犬の死骸の臭ひに惹かれて、野營場所へ忍んで行くところである。これは豹だつた。毛の多い長い尾と平ぺたい小さな頭で、豹だな、とすぐ判つた。斑點のある毛皮は、胡桃の木の暗い葉とすつかり混り合つて、眼に見え

なかつた。

闇の中で撃つても無駄であつたし、彼は遊底を動かす音に束縛された。ただならぬこの音を聞いた豹はキッとなり、緑色の眼をきらりと光らせて、茂つた藪の中に隠れてしまつた。

やつとその時になつて、ズメイカは先きへ動き出し、野獸の足跡を辿つて忙しさうに走つた。豹はもう遠くへ行つて引返して來ないことを、犬は知つてゐたのだ。

パボーシンは犬を呼び戻して彼の守護の下に安らかに眠つてゐる野營場所へ近づいた。馬は馬糧桶の側に立つて枯草を噛んでゐた。齒の軋る音が、夜の靜けさの中に聞えてゐた。

ナスターシャは毛皮の中でよく寢入つてゐるらしかつた。彼は眼を覺さないやうにと、靜かに橇を迂回して焚火の傍にごろりとなり、新しい薪を一ト抱へもくべた。

すると、火勢が盛んになつて黝んだ高い森の梢へ、ぱつと火の粉を撒き散らしながら、明るい焔の柱が舞ひ上つた。

疲勞し、怪我してゐたにも拘らず、ズメイカは眠らないで、猛獸の近づくのを嗅ぎながら、怨みの森の繁みから迫る危險の兆を注意深く追ひながら、野營場所の周圍を巡視してゐた。

パボーシンも寢なかつた。パイプを吸ひながら考へごとに耽つた。落著かぬ彼の頭からナスターシャのことが去らず、彼女の運命は、いよいよ彼の心を惱ますのであつた。

パボーシンは友の死を悼むと同時に、彼の人生觀を變へ、彼の魂を動かし、そしてこの方がもつと惡かつたかも知れぬが、彼の心を捉へた女性のことが、頭から離れなかつた。

彼は自分を馬鹿、阿呆と呼んで腹を立てたが『女』が『男』より肉體的にも精神的にも强いことが判つた、といふ事實は認めねばならなかつた。

（こん畜生！）勢よく燃えてゐる焚火の焔をじッと見ながら、彼は考へた。（まさか俺は女蕩しになつた譯ぢやなからうな？　これ以上の災難はないぞ！　それに、何だつてこんな柄でもないことに鼻を突ッ込むんだ？　あの鼻眼鏡は、俺がナスチヤに惚れたと言つたが、それはまた本當だらうか？　神よ守りたまへ、救ひたまへ、ナスチヤをまた一人で置く譯にも行かん。眼の前に兩親がゐたつて、女は危ない！　いや、俺は見捨てる譯にはいかん！　グリゴーリイは俺の親友だつた。だから俺は奴の女房の力になつてやらねばならぬ！）

（いや、パボーシカ！　お前はこの一件から、もう逃げられないぞ！　スープ鍋に落ちた鷄

同然だ！　だが、乘りかかつた船だ、行くところまで行くか！　それにナスターシヤは女ぢやあるが、どこから見ても立派なものだ！　外の女とは全然違ふ！　いや、あの女が侮辱されたら默つちや居れんさ！　やるならやつて見ろ、だ！）彼はかう言つてから、森ぢゆうに響くやうな聲で「ウオオ！」と自棄に叫んだ。

　この叫び聲で、附近の樹々の枝から雪がばらばらとこぼれ落ち、近くの丘で聲を揃へて唸つてゐた狼の聲が、ぴたりと止んだ。

　繋がれたまま眠つてゐた馬が、足踏みしながら、おびえたやうな嘶きでこれに答へた。

　一本立ちの朝鮮松の梢で、オホミミヅクが嘴をピチピチ音させてゐたが、今まで止まつてゐた枝を飛び出し、輕い羽を音もなく動かして、暗い密林の奥へ飛んで行つた。

　叫び聲を聞いたズメイカは、野營場所に戻つて來て、さも訝しさうにバボーシンを見てゐたが、「どうかしたんですか？」と訊ねてゐるやうに見えた。

「何でもない、何でもないよ。ズメユーシカ！」と犬の頭を撫でながら言つた。「異狀はないから、心配せんでもいいんだ！　なあおい、このバボーシンは、いい年をして、老いぼれの牡馬

みたいな馬鹿な眞似をやつてゐるなあ！　俺はちやんと知つてるよ。お前は（いやはや、お前さんは老いぼれの犬だ！　柄にない眞似はお止しなさい）と言ひたいだらう――まつたくだよ大將！　でも、仕様がないんだ。かういふ因縁らしいよ。とてもあの女から離れられんね！」

　それから、白みかかつた空を仰いで呟いた。

「間もなく夜が明ける！　そろそろ用意に取りかかるか！」

　かう言ひながら、パイプの灰を膝頭で叩き出すと、腰をあげて、温かい毛皮の巣の中でよく寢てゐるナスターシヤを起しに行つた。

　大頭頂子の頂が、まだ姿を見せぬ朝日の最初の光線を浴びる頃、はや野營場所は、ざわざわし出した。

　最初の仕事は、グリゴーリイの死體を橇に載せることだつた。これは割に簡單に片附いた。身體が氷の塊りのやうに、すつかり凍つてゐたからだ。

　ナスターシヤはグリゴーリイの死體を橇の上に載せると、生きてゐるもののやうに、毛皮外套を被せ、顏だけ見えるやうにし、血にまみれて凍りついた雪を、拭き取つてやつた。

「さあ、お乘り、ナスチヤ！」出發の用意が出來ると、パボーシンが聲をかけた。
ナスターシヤは、グリゴーリイの枕許に坐り、その頸を抱いて言つた。
「生きてゐる人がゐなければ、死人とかうして生涯を終へるつもりですわ！」
「しーツ！」パボーシンが呶鳴ると、待ちくたびれた馬が動き出した。
歸り途はずつと速かつた。前夜踏みつけた雪道は動きを輕くしたからである。

×

太陽がまだ眞上まで來ないうちに、馬を驅り立ててゐるパボーシンの大きな聲が聞えてきた。
私は迎へに出て、橇の上に横へられたグリゴーリイの死體を見、伏目になつてフラフラと跟いて來る痛々しい細君の姿を見て、悄然としてしまつた。パボーシンは小屋のある小丘の坂を登るとき、馬の轡をとつて曳き上げた。
かういふ姿を見ようとは思はなかつたので、友に訊ねた。
「パボーシン、どうしたんだ？　何かあつたのか？」
「訊いてくれるな！」彼は眼でナスチヤの方を示しながら答へた。

「後で話す！　ひと言で言ふと『牝虎』だ！」
私は强ひて聞かうとはせず、パボーシンとナスチヤが、グリゴーリイを埋葬するために停車場へ運ぶ前の腹拵へをしてゐる間に、馬の整頓に掛つた。
正午過ぎ、馬がすつかり休息して腹一ぱい食つてから、彼等は鐵道線路に沿うて、北に向つて出發した。
私は見送りかたがた、永い間並んで歩いた。パボーシンは、滿洲に於ける最も優れた狩獵家の一人グリゴーリイ・ゾートフの悲慘な出來事を私に話した。
私はこの話を聽きながら、グリゴーリイの死體の顏を眺めてゐた。穩かな顏で、生きてゐた時と同じく美しかつた。そしてパボーシンの話に注意深く耳を澄ましてゐるやうに思はれ、何か深く考へ込んでゐて、大理石のやうに白い額に細い溝が出來てゐるやうに思はれた。
地の上を行くのはこれが最後の主人を、ズメイカも見送つて、橇の後から跟いて行つたが、そのさかしげな眼の中に、この瞬間の氣分と純朴な犬の悲しみを、讀み取ることが出來たであらう。

私は二人に別れを告げて、橇に近より、氷のやうに冷たく、雪のやうに白いグリゴーリイの額に接吻した。

「ぢや行つてらつしやい！」私はズメイカの頸輪を押へながら親友たちに言つた。でないと、ズメイカが橇の後を慕つて飛び出すからだつた。

間もなく彼等の姿は道の曲り角に隠れ、永いあいだパボーシンの大きな聲が靜けさの中に聞えてゐたが、やがてそれも聞えなくなつた。

犬の曳紐を握つて、私は小屋へ戻つたが、密林の中で共に焚火を圍んで幾夜かを過ごし、獵不獵を共に仲好く分け合つた力強い狩獵家、陽氣で深切なグリゴーリイ・ゾートフを、もはや見ることが出來ないのかと思ふと、何とも言へない暗い氣持になつた。

眞暗な夜になつた。空は雨雲に覆はれてゐた。朝鮮松の梢をわづかに搖り動かしてゐた風が次第に強くなつて、ざわざわ音を立てはじめ、嵐の前觸れを思はせた。

逃げ出さないやうにズメイカを納屋に閉ぢ込めた私は、小屋の扉と雨戸をぴつたりと閉め切つて、さて寢ようと横になつた。しかし晝間受けた印象が強くて忘れられず、眼は冴えるばかり

なので、私は聖書を讀みだした。この神聖な本を讀み耽るにつれ、クリストの弟子なる單純な漁夫達によつてわれわれに殘された眞理が、いよいよハツキリとして來るのだつた。煩はしい浮世を遠く離れて原始的なこの密林にゐると、自身が自然や神に近いのを感じ、聖書の言葉が特別の幽玄な意味を持つのだつた。思ひがけなく牝虎に殺されたグリゴーリイの死は、造物主によつて決められた生に對する永遠の掟の、神秘的な現はれではないかといふ風に思はれた。

戸外は大吹雪が荒れ狂つてゐた。煙突の中で風が唸つて、そのたびに貧弱な小屋の壁は、みしみしと震へた。

夜明けになつて吹雪がおさまり、雨戸の隙間から朝映の明りが射し込んで來るころ、やうやく私は眠りにおちたのである。

私はまる三日、密林の奥の小屋で暮したが、そろそろ停車場へ歸らうかな、と思つてゐる時分、夕方近く「おい、おい、鼻眼鏡！　生きてるのか、それとも君まで牝虎に喰はれたのか？」と遠くの方から吹鳴るパボーシンの響きのいい聲が聞えた。

私は毛皮外套を引掛けて、小屋の外へ出た。もうその時パボーシンは馬の手綱をとつて中庭

にはひつてくるところだつた。

私の傍にやつて來るなり肩を叩いて、かう言つた。

「いよう、こんちは！　退屈したらう？　わが牝虎は停車場へ置いてきたよ。馬の始末をしてから、筋道立てて話してやらう」

「小屋へはひつて煖まれよ。馬の始末は僕がやる！　湯沸しを掛けといてくれ。肉のはひつた鍋も。すぐ行くから——晩飯にしよう！」私はかう言つて馬の始末にかかつた。パボーシンは例のパイプに煙草を詰めて、「よし來た」と言ひながら、小屋の內へはひつた。

ズメイカはながい間、グリゴーリイの死體に掛けてあつた毛皮外套や橇を嗅いでゐたが、やがて橫の方へ離れて、自分の悲しさと淋しさを愬へるやうに吠えはじめた。すると、すぐそれに應じて近くの谷間にゐる狼が吠えだした。そしてこの森の音樂會は、ズメイカを小屋の內に入れるまで、かなり永いあひだ續いた。馬に水をやり馬糧を與へて、門を閉めて、私は小屋に戻つた。

パボーシンは、晩食の用意の出來た食卓に、もう向つてゐた。「なあ君！」停車場から持つて來た酒壜を指して、彼は言つた。「俺は、今日を最後として、大いに飲むぞ！　それから禁酒だ！　斷じて飲まんぞ！」

「そりやまた、どういふ譯だ？」冷たい酒を自分の杯に注いでゐる友に向つて、私は訊いた。

「大かた何か譯があるんだらう？　偉い！　君はとうの昔に禁酒會員になるべきだつたんだ！」

晚食がすむと、パボーシンは醉拂つたが、頭はしつかりしてゐて、記憶も確かだつた。この密林の豪傑は、一壜の酒ぐらゐでは醉ひ潰れず、ただ威勢よくなり、お喋りになるだけだつた。

「さてッと。何もかもすつかり、ぶちまけて話すことにするかな！　だがね、おい、途中で話の腰を折るなよ。話がこんぐらかつて何も言へなくなるからね。記憶をハツキリさせるためにもう一杯、いいだらう？」

さつきの約束を思ひ出させて、私はとめた。彼は素直に答へた。

「ぢやいいよ！　要らないとも！　それでもいいさ！　眠くなけりや聽いてくれ！　まあ、俺達が停車場に著いたのは、まだ夜の明けないうちさ。橇に載せたグリゴーリイを俺の同鄉の奴ンとこへ運んで、夜が明けてから然るべく支度した譯だ。白く塗つて、モールで飾つた樫の棺

さ。ナスターシヤは剪つた垂髪を奴の胸に載せたッけ。お寺の法會や埋葬には隨分澤山の人が集つたが、みんな奴の善良な性質を愛し尊敬してたんだね。例のジプシイ女のフェーニヤも居たが、泣いて泣いてね。惚れてたらしいよ。ナスターシヤは、ひどく悲しんでね、棺を穴に入れる時、やつと俺が抱きとめたんだ。棺の後から穴へ飛び込まうとするんだよ。土饅頭が出來る頃には落著いてきたがね。そしてナスターシヤが十字架に『グリゴーリイ・ゾートフ牝虎狩に斃る』と書いたよ」

　彼女の身内では母親一人が見えただけで、父と兄達は、仕事を請負つてゐるボボフ兄弟の會社のある北の方へ行つてしまつた。

　ここまで語つた彼は、口を噤んで考へ込んだ。

「で何かい。良人の死んだ後、彼女は何處で暮さうといふんだい？」彼を物思ひから引き出さうとして、かう質問した。

「何處ッて！　勿論この山小屋だよ。母親が彼女を呼び寄せて一緒に暮さうと言ふんだがね。ところが、どうして！　てんで耳も貸しやしない！　密林の中に住むんだ、グリゴーリイの魂

が側についてゐてくれる、これだけで澤山、それ以上は何も要らん、と言ふんだ！　どうにも仕様がないさ。俺は默つてゐた。言つたつて無駄だからね。君も知つてゐる通りの性格だ。言ひ出したら梃子でも動かない！」バボーシンはかう言つて起ち上り、半シューバを著ながら、譯の分らぬことをぶつぶつ呟いた。

「女一人、密林の中に、どうして住めるんだ？　不可能だな」もう氣乘りがしなくなつて、話を續ける氣のないらしい友に、私は訊ねた。

　彼はこの質問にまごついて、ちよつと考へてから答へた。

「何だつてそんな事を俺に訊くんだ！　ナスターシヤに訊けよ！　彼女が此處に住むかどうか、俺が知るもんか！　彼女だつて自分でもよく考へたことがないだらう！　さうだね、今から推量するにも當らないさ！」

　それからズメイカを呼んで戸外へ出た。彼が獨り言を言つたり、犬に話しかけたり、大きな聲で唸つたりするのが聞えた。間もなく戻つて來て、パイプに火をつけて、床の熊の皮に寢ころがつた。

「君はナスチャのことはすつかり話したが、自分のことは一ト言も話さないぜ！　それはそれとして、君が彼女を、わが牝虎と呼んだ譯が知りたいもんだね！」これなら話を續けるのが嫌ではなからう、と睨んで、私はかう訊ねた。

「それア君！」テーブルの上で燻つてゐたランプを消して彼が答へた。「俺に關係のない事だから何も自分の事を話す必要はないさ。だが打明けて言ふと、彼女の運命に無關心ぢやないさ。第一に、グリゴーリイが死んだら彼女の面倒を見るといふ約束をしてゐるからだ。第二に、俺の同情心だ。第三に、彼女は女ぢやあるが、稀に見る好い人間だからだ！　俺がゐなければ、彼女は密林で破滅して了ふだらう。俺は彼女の小屋の隣りに自分の小屋を建てようと決心してゐる……

パボーシシの奴、いい年をして氣が狂ひ、女に惚れこんでしまつたッて、君は考へてゐるだらう。俺は知つてる。だが、さうぢやない。誓つてもいい！　君に對して俺は何の秘密も持たぬ。つまり、今やナスターシャは俺に取つては、俺を臓腑ごと食つちまつた牝虎といふことになる！　パボーシンは嘗つて存在したが――今や無し、だ！　さうなんだよ君！」

さう言ふと、パボーシンは默り込んだ。曇天のせゐで暗く沈欝に見える彼の顔が、パイプの火に照らし出され、物々しく靜かだつた。

ペーチカの裏で鼠の齧ぢる音が聞え、テーブルの上やカマドの邊りで晩食の殘りを食つてゐる油蟲のざわつく音がした。

パボーシンは寢ようとする氣配が見えないので、私はまた訊ねた。

「ナスターシャは、いつ此處にやつて來ることになつてるんだ？」

「分るもんか！」彼の太い低音（バス）が響いた。

「どうせ女のやる事だ。さう簡單には解らんさ！　四十日ほど町にゐて亭主の葬式をすまし、それからこつちに來るとは言つてゐたが、俺は彼女が歸つてくるまで此處にゐて、暖かになつたら自分の小屋を建てるつもりだ。場所は目つけてある。下の川岸だ。ここから約二百歩ぐらゐ。それから君に言つて置くが、ナスターシャは姙娠してゐるんだ。これは秘密だと言つて、彼女が告白したんだがね！　秘密でもなんでもない、有り觸れたことさ！　亭主持ちの女だ。當然の話だ。生まれるのは五月だらうと思ふ……さあ、これで殘らず話してやつたよ。今度は寢る

番だ！　おやすみ！」

それから彼は毛皮の夜著を頭から被つて、靜かになつた。間もなく規則正しい寢息が鼾に變つた。

模樣のついた窓硝子をとほして、蒼白い月の光が床に落ち、月影は徐々に食卓の方へ移動して行つた。食卓の上は、無數の蠅が、パン屑や食ひ殘しを盜みながら、先きを爭うて飛び廻つてゐた。

川の氷が寒さで、ぴりりッ、と音を立てて裂け、遙かに聞く銃聲を思はせた。

私が執拗く賴んだ結果、バボーシンは一週間ほど滯在し、それから一緖に山野を步き廻つた。狩獵だけが目的でなく、グリゴーリイが死んだ後の淋しさを紛はすためでもあつた。バボーシンは、自然がまだ原始的性質を保つてゐる人跡未到の場所へ、私を連れて行つた。われわれは、貧弱な狩人小屋すら見當らないベイダヤンの奧へ、はからずも足を踏み入れた。

日が暮れた。太陽が大頭頂子の岩だらけの峰に隱れる頃、朝鮮松の森を拔けて樫林へはひつたが、ある小道の曲り角で、突然三人連れの匪賊の巡視にとめられた。モーゼルの遊底ががち

やがちや鳴つて、銃口がわれわれに向けられた。何やら支那語で吸鳴つた。

突然だつたのでわれわれも立ちどまり、同じく遊底を鳴らした。

「ああ、ロシア人バボーシカだ！　バボーシカだ！」匪賊達の口から胴間聲が聞えて、忽ちみんなの氣が變つた。それから型通りの挨拶と握手があつて、首領の處へ案內された。首領は、丘の斜面に建てられて、鹿砦や逆茂木に圍まれた大きな家に居た。

われわれが家に近づくと、匪賊が全部飛び出して來たが、百名以上もあつたらうか、バボーシンを見ると歡迎して家の內へ招じ入れた。家の內にはひると、有名な匪賊の首領、片目の『一張鏡（イーチャンチン）』が、煖かい炕の上で、阿片を吸つてゐるところだつた。

それから三十分後には、われわれは匪賊と並んで炕の上に腰掛けてゐた。バボーシンは冗談や洒落を交ぜて話したが、それを聞いた匪賊達は、愉快さうに身體を搖つて笑ひ、家ぢゆうを震はせた。

匪賊達は支那の『吃飯（ナイファヌ）』と、强烈な煖めた白酒（パイチュウ）をご馳走してから、われわれに向ひ「お休みなさい」と言つて橫になつた。

翌る朝、射撃の腕比べが行はれた。そのときバボーシンは『ロシア人の名を恥しめず』一番高い朝鮮松の梢の松かさを、一つ一つ撃ち落として射損じがなかつた。その褒美として、斧石の吸口のついた煙管を、『一張鏡』が記念にくれた。

小屋の方へ歸る途中、ハイリンの盆地にある深い松林で、實を採るために松かさを集めてゐる支那人の『松かさ採り』の野營場所が見つかつた。松かさを採るだけの目的で巨木を切り倒してゐることを、勞働者達の口から聞いて、私の友はカンカンに憤り、『狂暴な虎の如く』突進して行つた。

勞働者達が晝飯に集まつたときバボーシンは、即座に仕事を中止して立ち去れ、さもないと鋸、斧などの道具を叩きつぶしてやると脅かした。勞働者達は抗議したが、彼はてんで相手にしなかつた。たうとう彼等は二つの銃口を突きつけられて、澁々ながら松の實を出した後の松かさを集めて焚火を作り、その中へ道具類を抛りこんだのである。

森の亂暴者達が自分等の斧や鋸を火の中へ投げ込むとき、いかに憎惡に燃える眼でわれわれを見てゐたかは、よく判つてゐた。しかし彼等は不可抗力には服從した。といふのは、バボー

シンは脅かす眞似をするのが嫌ひであり、言つた通り必ず實行する男であることをよく知つてゐたからだ。

勞働者は二十人くらゐだつたが、自分達の無力を悟り、運命論者のやうに、どうにも避けられぬ運命を、この中に認めたのだつた。

すつかり終つて、罪の道具が廢棄されると、バボーシンは勞働者達を集めて、もう家へ歸つて、この事を仲間の者に話すがいい、と宣言した。

ぐづぐづしてゐて、また何か因縁をつけられては、といふので、勞働者達は、山道傳ひに寧古塔のある南東の方角へ、そそくさと歸つて行つた。

「丁度好い時に奴らを捕まへて好かつたよ！」バボーシンは空の袋に松の實を詰めながら言つた。「でないと、でかい木を隨分切り倒したことだらうぜ！　好かつたよ！　俺の領地内の木を切ることならん、といふことが、これで奴等に判るだらうよ！」

「だがね、奴等がもし武器をとつて抵抗したら、どうするつもりだつたんだ？」勞働者達が殘しておいた物を焚火に抛り込んでゐる彼に訊ねた。

「どうするつもり？　そんな事は判り切つてゐる。鶺鴒みたいに片ツぱしから、ぽんぽん殺つちまつてゐるさ！　奴らはそれを知つてるから、コソツとも音を立てなかつたんだ！　さあ歸らう。小ロシア人の言ひ草ぢやないが、ハータ（註・小屋のこと）まで夜になる時分には戻れるだらう！」と彼は言つて、松の實を詰めた袋に、支那人の殘した袋を結びつけて、肩に擔いだ。松の實のはひつた袋がまだ五つ野營地に殘つてゐたが、これは後で寧古塔へ運ばれた。

牝虎

冬が過ぎた。吹雪とともに嚴しい寒さが歇んだ。

春が來て、密林は青々としてきた。生暖かい空氣の中に、樹脂を含む新芽の蕾の匂ひや、花咲く草木の香ひが充ち滿ちた。山のスロープには、鈴蘭や芍藥の花が咲き亂れ、森の中には、ジヤスミン、ライラツク、野林檎、眞赤な百合などの花が、一面に、華やかに咲き競うてゐた。

自然の美を讃へる小鳥の和やかな合唱の中で、神秘の鳥チヤオールの聲が、朝やけ夕やけ時

分に、森の巨木の梢で、際立つて聞えた。フリユートの音に似たこの鳥の啼聲は、靜まり返つた密林に響きわたり、遙か遠くの懸崖にぶつかつて反響が戻つてくるのだつた。

かういふやうな春の日で、すべてのものが歡びに滿ちて、生活の樂しさに醉うてゐる時だつたが、私はパポーシンと二人、ゾートフの山小屋を指して、密林に入り込んだのである。

一緒に袋角取りに行かう、と彼は私を說きつけて、横道河子のロシア人部落、彼に言はせると『文化と文明の眞ン中』から私を引ぱり出し、海林河の上流を目ざして、野獸の通路傳ひに南東へ連れて行くのだつた。

二日目には、いつもの道に出た。夕方ごろ小屋に著く筈だつた。

チヤオールの啼聲を聞いて、友は立ち停つて言つた。

「あの聲は、森林の中を永遠に彷徨するやうに運命づけられた旅人の靈魂の叫びだと、支那人は言つてゐる。あの島は人間を密林の奥深く誘ひよせる。そこで人間は王大（ワンタァ）、つまり虎の爪で生命を落すといふのだ。そんなことは信じちやゐないが、試めしに後をつけて行くと、そのたびに、外へ出られないやうな奥へ迷ひこむんだ。あの鳥の姿は滅多に見られない。一番高い木

の梢に止まつてるんだが、啼聲だけは一露里、それ以上の處まで聞える。どうだ、好かつたら、跟いて行つて見ようか。尤もさうなると、今日中には小屋に著けないがね！」バボーシンはかう言つて返事を促すやうに私を見たが、その眼には愉快げな火が輝いてゐた。

勿論私はきつぱり斷つた。といふのは、私が興味を持つてゐたのは、早く小屋に著いて、ナスターシヤの様子を知ることであつたからだ。何しろバボーシンと來たら「行つて、自分で見るがいい！」と言ふだけで、どうしても彼女のことを話したがらなかつた。

夕方になつて、遙かに見える大頭頂子が、暗い黄昏の中で、入日の光をうけて深紅の色に燃える頃、われわれは小屋に辿りついた。

ズメイカが嬉しさうに吠えて迎へ、つづいて様々な毛色の犬の群が飛び出してきた。

その騷ぎにナスターシヤ自身が小屋から出てきて戸口に立つたが、歡ばしさうに叫んでわれわれを歡迎した。

「たうとう、いらしたわねえ！　あれつきり、もういらつしやらないものと思つたわ、あたし！　可哀さうなやもめ婆さんのことなんか、お忘れですのねえ！」

「へえ、これはご挨拶だね！」私の後から小屋にはひりながら、バボーシンが答へた。

小屋の内は、眼を突かれても判らない闇さで、部屋の中央にぶらさがつたランプに、ナスターシヤが火をつけ、初めて私は見廻すことが出來た。

部屋の内の様子は、少しも變つてゐなかつたが、ただ隅にある寢臺の傍に、天井から吊り提げてある赤ン坊用の搖籃が眼についた。

ナスターシヤはその搖籃に近づいて、毛布をめくると、すやすや寢てゐる立派な丈夫さうな嬰兒を、私に見せた。

「これ、どう？　あたしの息子よ！」彼女は言つた。

その聲音には、母親の誇が聽きとられ、眼差には、落著いた自信と幸福が輝いてゐた。

「これは傑作だ！」私は赤ン坊をしみじみ眺めながら答へた。「お父さんに生き寫しですね！」

「ええ、グリゴーリイにも、あたしにも似てますわ。動作や笑ひ聲はお父さんに似てますの」

私は別に反對しなかつたが、バボーシンは、ナスチヤを揶揄つてからう言つた。

「そんなこたあないさ！　母親にも父親にも似てないよ。通りすがりの若者に似てゐる」

彼女は返事もせず、輝いた眼をチラと向けて、赤ン坊に毛布をかけると、そのまま臺所へ行つてしまつた。

パボーシンは私に目くばせして外庭へ出ると、年寄りの支那人を連れて戻つてきた。

「おい君！」彼は私の方を向くと老人の背中を叩いて言つた。「紹介するが、これは俺の相棒で、獵師のツーマンだ。（この男がツーマンだつた）こいつは袋角をいつも煮てゐるんだ。そんなことはどうでもいいが、ナスターシヤの手傳ひをやつてゐる好人物でね、沈香もたかず屁もひらずツて奴さ。可愛がつてやつてくれ。前身は匪賊で、大分罪を重ねたが、今ぢや溫順しいもので蠅も殺さぬ善人だ！　蠅つてやつは俺達の大敵で、袋角の粒を盜んぢや臺なしにするんだがね」

年寄りの支那人は、パボーシンの言葉には注意も拂はず、粥のはひつた大きなスープ鉢をカマドからおろして、犬に食はせるために、外庭へ運んで行つた。

ゾートフの小屋も內側を仔細に見ていくと、著しい變化が眼につき、いろいろと骨を折つた跡が見られた。床は綺麗で、掃除が行き屆いてゐた。食卓は模樣のついたテーブル掛で覆うてあり、壁には大きな鏡が掛けてあつて、その兩側に、狩獵生活を描いた石版刷りの畫が飾つてあつた。その反對側に、彫刻のある黑い額に嵌まつた大きなグリゴーリイの肖像が掲げてあつた。新しい樫の枝で額が飾つてあり、その下にはジヤスミンの花束が置いてあつた。到るところ、壺やブリキ罐や水差に花が活けてあつて、部屋の內にその香ひが漂うてゐた。その香ひは、他の臭ひ——野獸の毛皮、人間の汗、カマドの上にづらりと干してある赤ン坊の襁褓などの臭ひを柔げてゐた。

寢る前に女主人は、前の晚支那人が釣つてきたタイメンで拵へた脂こい魚汁と、シベリア肉饅頭などの豪勢な晚食をご馳走してくれた。

食事の前に、パボーシンは、苦蓬のはひつたウオツカを一杯だけ『流し込む』ことを許された。

二杯目は頭の中で空想するだけだつた。

（おや！）とその時私は考へた。

（山男のオツサン、ナスターシヤに首ツ玉を押へられてるぢやないか！　ぐうの音も出ない！

これで巧く行くだらうな！　でなけりやこの男、すつかり酒で駄目になるからなあ！）

私はナスターシヤを眺め、彼女の華奢でスマートな、しかし引き締つた姿態を、しげしげ眺めた。あの強烈な力、限りないエネルギイと忍耐力が一體何處から湧いてくるのか、解らないぐらゐだつた！　が表情に富んだ大きな彼女の眼には、大きな精神と強い意志が感じられた。

精神的にも肉體的にも人並優れた密林の熊バボーシンが、弱くて短所だらけの女に押されてゐる譯が解つた。バボーシンが彼女を牝虎と呼び、自身を彼女の犠牲と呼んでゐたのも無理はない。

見掛けは痩せてゐるが、強靱で、非常に耐久力のある彼女だ。病的な衰弱とヒロイツクな輸血の痕跡は全然見られない。ほんのり薔薇色をした兩頬は、すつかり健康を取り戻したことを語つてゐる。

夕食後ナスターシヤは赤ン坊に乳を飲ませた。まつたく温順しい靜かな赤ン坊で、熊のやうなバボーシンの掌に抱かれても、泣き聲一つたてなかつた。バボーシンは赤ン坊の抱き方を知らなかつたので、まるで薄い硝子で出來た品物か何ぞのやうに、落すのを怖れて小さな身體を

抱いてゐた。

兩手に赤ん坊を抱いた彼の恰好といふものは、實に滑稽で、ナスターシヤも思はず噴き出して、かう言つた程だつた。

「まあ可笑しな人、アキンヂン！　あなたは赤ん坊を抱くのが、蹄鐵を折り曲げるより難かしいのね……」

かう言はれると、山男はいよいよどぎまぎして赧くなり、汗をかいて、手を震はせながら、大切な寶物を母親に返した。

「なアに、俺の手は子供を綾すやうに出來てないんだよ！」人の好ささうな笑ひを浮べながら答へた。「何の氣もなく赤ン坊を押し潰しやしないか、それが心配だし、萬一取り落としてみろ、忽ち牝虎に引き裂かれちまうからな！」

すつかり片附いて、赤ン坊が乳を飲んで搖籃の中で寢入つてしまふと、ナスターシヤは蓄音機を棚から持ち出して、食卓の上に据ゑた。レコードが廻り出すと、ロシアの歌聲が小屋一ぱいに滿ち、開けぱなしの窓を越えて森の奥や幽玄な樹海の山砦まで響いていつた。この音色は

この密林では、世界始つてから初めてであつたらう！　密林ぢゆうの野生の動物は、夜の靜寂の中で、この音色にじつと耳を澄ましたまま、身動きもしなかつた。大みみづくは朝鮮松の梢で沈默し、夜鷹の哀れな唄聲も歇み、岸邊の灌木林で啼いてゐた蛙の合唱もぱつたり杜絶え、誘きよせるやうな薄氣味惡いチャオールの叫び聲も聞えなくなつた。山も森もレコードの音を聞いて靜かになり、大自然そのものも、自分の歡ばしい愛と復活の讃美歌を中止して、敬虔な氣持でレコードに耳を傾けてゐるやうに思はれた。

支那人ツーマン、と私の友は呼んでゐたが、それが玄關口に腰をおろして、注意ぶかく聽いてゐた。密林の住人はみんなさうだつたが、この男も蓄音機の音がどうしても腑に落ちず、きつと喇叭の後に惡魔がゐて、人間の聲を眞似て歌つてゐるものと思ひ込んで、怖る怖る喇叭を覗きこむのだつた。その眼には不安が現はれてゐた。この奇蹟を理解しようとして、この男の頭惱は、しきりに活動してゐたのだ。未開の魂は、不思議な眼に見えぬ力が眼の前に存在してゐる、といふことを考へて、すつかり驚愕し、恐怖に囚へられたのである。

この男が蓄音機を聽いたのは、これが初てではなかつた。しかし『白い惡魔』の不思議な機械を眼の前に見ると、どうしても恐怖に打ち克つことができなかつたのだ。

この男を蓄音機の傍に近寄らせることは、どうしても出來なかつたが、それでも何やら魔除けの禁厭らしいことをぶつぶつ呟きながら、遠くから聽くのは好きだつた。

ナスターシャは、グリゴーリイが好んだ『夜の調べ』をよく掛けた。

パボーシンは、彼の言葉を借りると『心臓を引き掴む』ために、『魂を掻き捲る』やうなレコードや小唄の方を好んだ。

音樂會は夜更まで續いて、われわれが寢たのは、もう晩かつた。

私は蓄音機を聽きながら、小屋の內にあつたささやかな藏書を、殘らず見ることができた。その中にロシアの古典や『ニーワ』を初め、いろんな雜誌を發見した。そして、どの木にも、極東に於ける唯一の木屋で滿洲に住むロシア人全體に精神的糧を供給してゐるハルビンのイワン・チホノーウイチ・シチエロコフのスタンプが捺してあつた。

「ボーリカは寢て身動きもしない！」馬小屋近くの乾草置場に寢ようと這ひ込んだとき、パボーシンがかう言つた。「父親そつくりだ！　やつぱり靜かで、おとなしい！　だが、洗禮を受

けるときは、ワシーリイ神父の髯に掴まつたつけ。あの子の名付親ッてのが、この俺さ！　つまり、ナスターシャの子供の敎父になつた譯だ！　今から考へると、あの時君が言つたのは本當だつたなア。俺もいい年をして女に惚れこんぢまつた譯だ！　どうにも仕方がない！　一緒になつてくれ、と口說いたんだが、とてもとても。耳も貸してくれない。今のまましばらく面倒を見てくれ、そのうちに考へるから、いづれにしても一年たたぬうちは結婚しない、といふんだ。つまり、グリゴーリイの一周忌をすましたら、といふ譯だな。女ッて、そんなもんだよ。俺はあの女から離れようとしてゐたんだが、向ふの方で離さないんだ。離さないわ、と言つたら、もうそれつきりだ。何でも思つた通りやるんだからな！　燧石みたいに頑固な俺も、ナスターシャに逢ふと、ボロッ切れ同然さ！　俺はもう自分の意志なんて失くしちまつて、あの女の言ひなりに動いてる。その方が却ていいかも知れん。智慧ッていいもんだし、二人分寄せりアなほいいさ……いや、女の話はもう澤山だ！　他の話をしよう。あすの朝、新規に鹽地（註・鹽を土に沁ませてその匂ひで山羊を誘き寄せる罠）を拵へに出掛ける。夕方から古い方の隠れ場所（註・罠の看視のための）に頑張るつもりだ……ほう！　見ろよ、北斗七星が隨分

低くなつたぢやないか！　晩いんだね。おやすみ！」

　それから彼は私に背を向けて、好い匂ひのする枯草の中に潜りこんで寢てしまつた。

　間もなく私もそれに倣つて、蟬と蟋蟀の啼き聲を子守唄に、ぐつすりと寢こんでしまつた。

×

　私が眼を覺ました時は、もうパボーシンの姿は枯草置場の内に見えず、新しく鹽地を作るために、鹽袋を擔いで完林へ出掛けた後だつた。

　夜が明けたばかりで、露の匂ひがただよひ、すがすがしい山の空氣の中に、夜の冷氣が感じられた。

　樹の茂つた峰の裏から太陽が昇るところだつた。大頭頂子は薔薇いろに燃えてゐた。

　ナスチヤが小屋から出てきた。ブリキの金盥を兩手に持つてゐるのが見えた。彼女は響きのいい最低女聲音（コントラルト）で鷄や鴨や鵞鳥を呼び集めて、餌を投げた。家禽どもは群をなして、押し合ひへし合ひしながら、ガアガア喚めき立てて殺到し、彼女の足許に集まつた。彼女の頭に卷かれた格子縞の覆髮頭布（プラトーク）の下から、房々と波打つた豐かな髮が、兩肩にバラリとかかつたまま黝ん

でゐた。

私は、グリゴーリイの死體の胸に置かれた彼女の美しい垂髪を憶ひ出した。そしてこの非凡な女性の全身が特別な光に照らされて私の眼に映つた。彼女は逆光線を受けて立つてゐたが、頭の周圍に光の輪が出來て、まるで後光が射してゐるやうに見えた。

彼女は私を見て、聲を掛けた。

「お早うございます！　朝ご飯にいらつしやいな！　美味い肉饅頭を焼きましたわ！　アキンチンも間もなく歸つてくる筈ですわ！」

私はその聲に應じて、すぐ小屋にはひつた。

もう眞鍮のサモワールが沸いてゐて、薄紅色の肉饅頭が私の嗅覺を擽つた。

野葡萄で拵へたジャムを入れて、堪能するほど茶を飲んでから内庭へ出てみた。以前に比べると、パボーシンの手でいろんなものが建て增してあるのに氣がついた。湯殿、厩、鷄小屋、乾草置場など。小屋の周圍を取り卷いた新しい垣の上に、鐵條網が張り廻らしてあつた。それぞれの柱には狭い銃眼が作つてあつて、何だか小さな要塞といつた感じだつた。

小屋の後の垣に接して、小さな小屋が建つてゐて、ここにツーマンが住んでゐた。その傍に袋角小屋があつた。これは粘土製の爐を作りつけた納屋で、新しい袋角を煮る大鍋が、その爐に塗り込めてあつた。木架の上に煮た袋角が乾してあつたが、これがやり切れない臭氣を發散した。

その上を蠅の群がぶんぶん飛び廻つてゐたが、袋角に止まるものは一匹もなかつた。あらゆる昆蟲類が嫌がつてゐる草の汁が、この袋角に浸みてゐるからで、袋角を煮る人間はこの草を秘密にしてゐる。

當のツーマンは部屋の内に居なかつた。タイメン釣りに朝から川へ出てゐたのだ。

正午ごろ、パボーシンが姿を見せた。彼と一緒に、二十人ぐらゐの『溫順しい』匪賊の一團がやつてきた。

脊の高い逞しい支那人で、モーゼル拳銃を帶びた匪賊の首領が、ナスターシヤに近づいて、丁寧にお辭儀をしてから、支那語で何か言ひ始めた。支那語の判るパボーシンが、それを通譯した。

首領は
「獵師グリゴーリイ・ゾートフは善い人間で、心が綺麗であつた。われわれは好きであつた。彼に對する記念として詰らない贈物ですが、受け取つて下さい。われわれはグリゴーリイの細君を知つてゐる。彼女は良人の死を救つた。われわれは、この贈物を彼に贈るつもりであつたが、冥土へ行つてしまつたので、彼の妻にこの贈物をお渡しする」と言つてから脇へ寄り、手下から袋を受け取ると、それをナスターシヤの足許に置いた。

突然のことに面喰つた彼女は、我に返ると、バボーシンの方を向いて言つた。

「贈物など頂いて感謝の言葉もありません。あたしは弱い、詰らない女に過ぎないんですから、こんなものを頂く資格はありませんツて、傳へてください！」

その時、首領は袋を解いて、立派な虎の仔を中から取り出した。まだ眼も開かない赤ン坊で、乳首を求めて、丸い鼻ツ面を掌に突込んでゐた。

「こいつ腹がへつてるんで、乳を呑みたがつてゐるんですよ」虎の仔をナスターシヤに渡しながら首領が言つた。「だが、當分蜜を混ぜた水をやりアいいですよ」

虎の仔を受け取つた彼女は、それを抱いたが、ふツと電光のやうに（水など飲ませなくたつて、私のお乳を飲ませることが出來るではないか）といふ考へが閃めいた。

彼女は大して思案もせず小屋の内へ駈けこむと、肱椅子に腰かけて胸をはだけた。虎の仔は、生きてゐる肉體の温かさをすぐ感じて乳房を探し當てて、勢よく乳を吸ひはじめ、をりをり頭を動かしたり前脚をそへたりして、ともすれば離れ勝ちな乳房を銜へなほした。

彼女が自分の乳房を虎の仔に哺ましてゐることを知つた首領は、すつかり有頂天になつて言つた。「グリゴーリイの女房は偉え女で、亭主と似合ひの夫婦だつてえことが、いまほんとに判りやしたよ。偉大な王（虎）の女房が偉大な獵師を殺しちまつたが、今度は偉大な王が、白人の女に仕へさせようてんで、手前の倅を送つたてえ譯でさあ！」

支那人の習慣通り、匪賊に茶を振舞つて、蓄音機を聞かせた。ロシアの民謠が特に彼等の氣に入つた。

匪賊たちは、壁に懸つてゐるグリゴーリイの肖像に氣が付くと、その前に代る代る立つて最敬禮をした。

どういふ譯でグリゴーリイは、かうまで匪賊の尊敬を受ける値打があるのか、どうしても私には判らなかつた。パボーシンに訊ねると、「君だつて知つてるだらうが、匪賊つてやつは、正直さ、大膽さ、上品さ、力、なんていふ、手前の持つてゐないものを非常に貴ぶもんだ。だから俺が死にでもしたら王大同樣、きつと俺を神樣扱ひにするこッたらうよ！」と答へた。

匪賊たちは小屋を去るとき、ナスターシヤに鄭重にお辭儀した。首領は彼女に握手して、蛙を彫つた幸福の金指環を、彼女の指に欲めてやつた。

腹いつぱい乳を飲んだ虎の仔は乳房から離れて、ナスターシヤの腕の中で、すやすや寢てしまつた。

虎の仔の次ぎは、自分の子供に乳を飲ませる番だつた。子供は柔かくて小さい兩手で、貰ひ子の兄弟を抱いて寢ながら、そろそろ乳で滿腹しはじめた。

兩方の子供に飲ませたら、ナスチヤは乳が足りなくなるだらう、と私は危ぶんだが、パボーシンは反對だつた。

「その點は心配ご無用だ。ナスターシヤは痩せちや居るが、乳が多すぎて困る位だ。間もなくズメイカが仔を産むから、そしたらズメイカに小さな王（仔虎）を育てさせよう……これでナスターシヤは本物の牝虎になつたといふ譯だな。王大の倅を自分の乳で育てるんだから！　俺が牝虎と言ふと、彼女は怒つて齒を露き出すんだが、その時の顏付と來たら、牝虎そつくりだよ！」

虎の仔のために、部屋の隅が割り當てられて、乾草を入れてある籠が置かれた。虎の仔は食べることと寢ることの外、何もしなかつた。眠つてゐる時は、抱き上げたり、撫でたり、耳を引ぱつたりしても平氣だつた。ただ仰けに引くり返すと、鼻をくんくん鳴らして起き上らうと骨折るのだつた。

ゾートフの小屋に虎の仔が現れたことは、その日その日の生活にいくらか活氣を齎し、生活に特別な色彩を與へた。

小さな王を飼つてゐるといふ噂は、山々や樹海ぢゆうに忽ち擴がつて、強い密林の王者の子供を見に、わざわざ遠くからやつて來た。これはナスチヤとパボーシンにとつて、煩いことではなかつた。といふのは、訪ねて來る人々はみんな溫順しくて、黑貂の毛皮や蜜蜂や乾茸や朝

鮮人参を、王のためにといふ風にして、土産に持つて來たからである。

バボーシンは、招かざる客を送り出しては、いつも言ひ言ひした。

「いやはや、大馬鹿野郎どもだ！　けだものを人間より偉いと思つてやがる！　やつぱり××人だな！　と言つたところでためにならんこともない！　子供らが乳にありつくからね！　だが、虎の仔が育つて王大になつたときは、一體どうしたらいいんだ？　うつかりすると、われわれみんな、自分を育てた母親も乳兄弟もみんな食ひ殺すんぢやないか！　大きくなつてからも乳で育てる譯には行くまいし！　猪や山羊を餌にやらねばなるまいが、さて餌がさうさう手に入るかどうか！」

ナスターシャはこの悲觀的な考へ方に反對して、大きな笑ひ聲で吹き飛ばした。

「馬鹿なことをおつしやい、バボーシカ！　うちの王(ワン)は獵のお手傳ひするやうになるんだわ！　それに、あんたなんかを食べるものですか。あんたは惡い酒と變な煙草の臭ひがプンプンするぢやないの。うちの王はそんな嫌らしいものは食べませんよ！」

私はバボーシンと、まだ明るいうちに露營地へ出發した。露營地は十キロほど離れた山上のテラ

スで、樫が疎らに生えてゐる處にあつた。

現場に著くと、嵐で倒れた楡の木の上に、それぞれ恰好の匿れ場所を拵へ、樫の枝や羊齒でカムフラージした。

その仕事が終つた時は、すでに太陽が山に隱れてゐた。われわれは低い聲で話しながら見通しが利いて射撃に都合のいいやうな位置に座を占めた。露營地はわれわれのところから百歩ぐらゐで、全體がまるで掌の上のものを見るやうなものだつた。

暗くなるのは速かつた。星が燦めき始めて、樹のおひ茂つた近くの峰から月が出て、燐色の明りで山や谷を照らした。

密林はしーんと靜まり返つて、何處か遠くの方で誘びき寄せるやうなツヤオールの啼聲が聞えるだけであつた。フリュートの音色に似た、旋律的なその啼聲は、夜の密林の靜けさを破つて、あとからあとから反響を生んでいつた。

小さな蟲の群が、われわれの鼻や口や耳だけでなく、シャツの内側まで這ひ込んで苦しかつたが、うつかりして一寸でも動かうものなら、袋角を持つた鹿を驚かして、すつかり獵が駄目

になつてしまふので、われわれはこの苦しい拷問をじつと我慢してゐた。
「俺はあの忌々しい鳥の啼聲が嫌ひでね！」バボーシンは頰に吸ひついた蚊を片手で拂ひながら、小聲で言つた。「祿なことはないよ、ちやんと知つてる！　それに、ツーマンの話だと、仔を盜まれた母虎の悲しげな聲を、昨日聞いたさうだ。密林の中を歩き廻つて仔を呼んでゐるんだね！　それが本當だとすると、拙いぜ、店を閉めるんだな。ただの一匹だつて此處へはやつて來ないからね！」
「なアに、一匹もやつて來ないだけなら、まだいいさ」もう少し友人を朗かな氣分にしてやらうと努めながら私は言つた。「奴がわれわれを揶揄ふつもりで、鹿をみんな追ッ拂ふんだつたら、無論かうやつてたつて仕方がない……」言ひ終らないうちに、バボーシンが私の肱を握つたと思ふと、やつと聞えるやうな小聲で囁いた。
「おい、あれを見ろ！　鹽地の向ふの、空地の、ほら、大きな樫ノ木の傍だ！」
敎へられた場所をじッと透かしてみると、なるほど、均齊のとれた大きな野獸の影が、靑白い月光を浴びて、くつきり目立つてゐた。

樫の藪が邪魔になつてよく見えなかつたが、その野獸が空地へのそのそと出て行つて、立ち止つたとき、すつかり判つた。
均齊のとれた姿態と小さな頭から判斷すると、まさしく牝虎だ。牝虎は、恰度われわれの眞向ひに立つてゐたが、黑いだんだら縞のある黃褐色の毛皮は、月光を浴びて靑銅色に見え、頰鬚や胸や腹などの白いところは銀色に輝いてゐた。毛の密生した尾は眞直ぐに伸びて、先端が搖れてゐた。圓味を帶びた頭がこちらに向くと、耳がぴんと立つて、大きな双つの眼が靑い火のやうにきらりと光つた。牝虎はわれわれの隱れ場所に氣付いて、どうもをかしいぞ、と思つてゐるらしかつた。
バボーシンは私の肱を押へたまま離さず、いよいよ强く握りしめた。
われわれ二人は、そのままじつとして動かず、息を殺してゐた。胸の中で心臟がどきどき音を立てて、その鼓動が遠くの方まで聞えるやうに思はれた。
牝虎はしばらくその場でじつとしてゐたが、やがてのそのそ歩き出したと思ふと、また立ち止まつて頭を垂れた。そのとき牝虎の聲が聞えた。それは咆哮ではなく、むしろ哀れつぽい唸

り聲か、泣き聲と言つた方が適當で、初は高い聲だが、だんだん低くなつて呻めくやうになる。それからまた頭を擡げて耳を欹てはじめるのだつた。

この牝虎の聲がすると、密林全體が死んだやうになつて、蟬さへ啼きやんだ。ただ血に飢ゑた蚊が、われわれの頭の上で勝ち誇つたやうにうるさくぶんぶん啼いてゐるだけだつた。

ツヤオールの啼聲も聞えなかつた。この島は虎が空地に姿を現した時、いち早く默りこんでしまつたのだ。

やうやく我に返つた私は、銃をあげて覘ひをつけ始めたが、銃をおろさねばならなかつた。といふのは、バボーシンが低い聲で次ぎのやうに言ひながら重い手で銃を押へたからだ。

「いけない、君！　止したまへ！　どうしてあれが殺せるかい？　あれはうちの小さな王の母親ぢやないか！　今の聲を聞いたかね。あれは子供を求めながら泣き悲しんでる聲だ。あれを殺したら、ナスターシャが何と言ふだらう！　生かしておいて神を讃へしめよ、だ。聖書にあるぢやないか。創られしものみな神を讃へたり、とね」

私はそれに同意する外はなく、氣を落著けた。

牝虎はわれわれの話聲を聽いたとみえ、藪の中へ姿を隱した。哀れつぽい牝虎の唸り聲がまた聞えたが、今度は遠くの方で、それつきり靜かになつた。ツヤオールの啼聲も二三回遠くの方でしたやうだが、そののち何も聞えなかつた。「どうだ」とバボーシンは小屋へ歸る道すがら言つた。「今日は無駄骨だつてことを、俺はちやんと知つてたんだ！　不吉な鳥の啼いた譯が判つてる！……俺はね、虎の仔を牝虎に返してやりたいと思ふんだが、ナスターシャはてんで耳も貸さないんだ。〝やりたけや、やつてごらんなさい。その代り今後一切あたしの目の前に姿を見せないで頂戴！　もしも牝虎を殺したら、あんたを犬みたいに追ひ出して了ふから。決してあんたと結婚しないから！〟とかうなんだ。君、考へてみてくれ。理窟も何もないんだから！」

「僕は君の氣持も判らん！」夜明ごろ小屋に戻つて、乾草置場に横はつたとき、私は彼に言つた。「誰が君をナスターシャに結びつけたんだ？　あれほど女嫌ひだつた君が突然彼女に手綱を取られてゐるんだからな……尤も、なすべき義務は果さなきやならんが。あの女は特別な女だし、あの女を選んだことは賛成だ。あんな立派な女は探したつて外には居ない！」

「實はね君！」パボーシンは、しばらく考へ込んだのち、「どうしてこんな事になつたんだか、自分ながらさつぱり解らないんだ！　君も知つての通り、俺にとつては、女なんぞ存在してゐなかつたし、ナスチヤだつて他の女と別に變つてゐなかつた。ところが、ナスチヤがグリゴーリイを救つて、ヒロイツクな精神を發揮したあの時から彼女を見る目が違つてき、意見が變つたんだ。その時から俺は自分といふものを失ひ、彼女の奴隷になつてしまつた！　これは好い事か惡い事か、俺は知らない！　だが、好いことだ、といふ氣がする！　君はどう思ふ？」

かう言つて彼は探るやうな眼付で私を見た。

「そいつには意見が二つある筈がない！」私は彼に調子を合はせようと努めながら答へた。「ナスターシヤは君が自分で言ふ通り、どの點から見ても立派な女だ！　男は女なしぢや暮して行けぬ。あれ以上の女を見つけることは不可能だ！　君はもう若いとは言へないし、歳から言つたらあの女とは釣り合はないが、しかし若い者に相當ハンデキヤツプがつけられるし、『ロシアの土を辱しめない』だらうからね！　俺は信じて疑はないよ！　だが、氣をつけろ！　問題は簡單に片附かないぜ！　ナスターシヤは、すぐ男の言ひなりになる女と女が違ふ！　利か

ぬ氣の、きつい性格を持つてるからな！　どうやつて近づくか女の何處を掴まへたらいいか、そいつを知る必要があるね。君はあの女を牝虎と名付けたが、いやまつたく、あの女には野獣的なところが何處かある！　だが、牝虎を征服することの出來るのは牡の虎だけだ！　そこで君があの女の牝虎になり、王大になつたら、あの女はすつかり君に服從し、萬事、旨く行くだらうよ。だが君の方があの女に屈從し、奴隷になつたら——もう駄目だ。牝虎は君から離れ去つてもつと強い、ぐんぐん押し捲るやうな奴ンとこへ行つて了ふ。自然界の現象を思ひ出せよ。牝虎はどんなのを好むか？　だから君！　もし君が意志の力を感じるなら、牡の虎になれるならだ——大膽に思ひ切つて振舞ふことだ！」

パボーシンは、私の言ふことにじツと耳を傾けてゐたが、パイプを吸ひ終り、

「君は俺をボロツ切れだと思つてゐるらしいな？　俺には女が扱ひ切れんと言ふのかね？　なるほど俺はあの女の奴隷だらう。だが自分の意思は誰に對しても曲げないよ。牡の虎だつて牝虎の奴隷になるが、しかし、同時に牝虎の命令者でもある！　俺のことは心配御無用に願ひたい！　俺は本當の牝虎を今まで難なく扱つてきた。ナスターシヤを扱ひきれんといふことがあ

らうか！　いや、君、君は俺を見損つてゐる！　俺を折ることは出來ようが、俺を曲げることは誰にも出來ないんだ！」

「俺だつて君をボロッ切れとは思つちやゐないさ！」と私は反對した。ただ「君は女に對する術策といふものを知らない。これを知らなけりや、女を征服することは難しい！　君は密林の掟を知つてゐるが、女はこの掟の外に立つてゐて、この掟に從はないんだ！　女は自身の掟を持ち、自分の論理を持つてゐる。だが、君にはこれが解らないんだ！」

「術策なんて糞喰へだ！」とバボーシンはいつもの落著を失つて、庭いつぱい響くやうな大聲で呶鳴つた。「そんなものは無くたつていい！　ナスターシャは聰明な女だ。術策を用ひなくたつて、どれが眞實だか、ちやんと見拔く女だ！」

ここでわれわれの話は杜切れた。バボーシンはパイプの灰を叩き出すと、私にくるりと背中を向け、毛皮の夜著を頭から被つて鼾聲を立てはじめた。

われわれが眼を覺ました時は、もう陽が高かつた。內庭では鵞鳥がガアガア啼いて、鳥を呼びあつめてゐるナスターシャの響のいい聲が聞え、納屋の屋根や鳩小舍で、鳩がククと啼い

てゐた。バボーシンは機嫌が良くないらしく、默つてパイプをふかしながら、怒つた熊のやうにぶつぶつ言つてゐた。

×

われわれは、斑點のある鹿を追うて丘から丘へ歩き廻るうちに、南東にあたる牡丹江の盆地へ深入りして、左岸の支流に沿うて、いはゆる『岩石の盆地』支那語で言へば『石頭山澗（シトウシヤンジェ）』へ降りて行つた。この盆地は四十露里（約十里）ぐらゐで、どうしてこんな名がついたかと言ふと、表面が全部冷えた熔岩で覆はれてゐるからであつた。そしてこの熔岩地帶には、まだ土壤や堆積物が十分に被さつてゐないので、大部分は褐綠色の鋪道を思はせる地肌を露はに見せてゐた。熔岩の割れ目や窪地には密生した草や、灌木や、野葡萄の蔓が、青々と繁つてゐた。

盆地の左右にある山の傾斜面は、樫の林で覆はれてゐた。

熔岩層の薄い處に立つと、下の方に水の音がはつきり聞えた。熔岩に覆はれた足の下の谷川が、牡丹江との合流點を目がけて奔流してゐる音であつた。

われわれは夕方時分に牡丹江の河水で出來てゐる鏡泊湖へ出て、ここの岸邊の斷崖で夜を明

かすことにした。われわれの焚火は、靜かに澄みきつた湖水に、赤味を帶びた光の束となつて顫へながら反射した。

藥罐に湖の水を汲んで火に掛けたバボーシンは、岸邊の方へ歩み寄つて、眼の前に繰り展げられた素晴らしいパノラマを眺めながら、ながい間突つ立つてゐた。

盆地の上に鋸形をなして聳えてゐる樹の茂つた峰の後から、月が昇つた。大小さまざまの沼が、磨いた鋼鐵片のやうに光りながら、遙か彼方の暗い峽谷まで連り、末は鬼火のやうに輝きながら消えてゐた。濕つぽくて生温るい空氣に花や水生植物の香ひが漂ひ、森の精なる螢は、動いてゐる網のやうに、到るところで飛び交ひながら湖に活氣を添へてゐた。

眠りに落ちた大自然の靜けさを破る物音とては一つもなかつた。ただ、をりをり魚が岸邊で跳ねたり、遠くの干潟で蛙が聲を合はせて啼くだけだつた。

鏡泊湖に於けるこの夏の夜の光景は、實に夢幻的な美しいもので、古くから密林に住むバボーシンでさへ恍惚となり、感歎の眼を離すことが出來なかつたほどである。

パイプをふかしながら岸邊を歩いてゐたバボーシンは、焚火の傍にやつて來て、ナポレオン

のやうに手を胸にあてながら、かう言つた。

「滿洲で景色の好い處を、俺は隨分知つてゐるが、こんな美しい景色は初てだ！　ここに小屋を建てたら、いいだらうなあ！　うちの牝虎にこの景色を見せる必要がある！　あいつ、すつかり氣に入つて、ここへ虎穴（すみか）を移すといふにきまつてるよ！」

どうせ例の『實現されない空想』だと判つてゐたので、私は別に異議も唱へなかつた。

われわれは、その晩そこで夜を明かして、朝早く僧院へ出かけた。この僧院は朝鮮松の巨木や落葉松に覆はれてゐる岸から、ほど遠からぬ岩だらけの島の中にあつた。

顎に白い鬚が疎に生えてゐるエジプトの木乃伊のやうな顔をした老僧が現はれて、奥へ案内してくれたが、そこの深い壁龕の中に、幅廣い頬に微笑を浮かべて傳統的なポーズをした眞鍮の釋迦如來像が見えた。

老僧は佛像の前に香りの高い臘燭をともして、廟の戸口にさがつてゐた鐵の鐘を二三回打ち鳴らした。鐘の音は低く顫へながら靜かな湖の奥へ響き渡り、樹木の茂つた遙か向ふの山峽のあたりで消えた。

やがて廟から出てきた老僧は、壁際に倒れてゐた大きな樫の丸太を、杖で叩きはじめた。すると丸太の下から四アルシンほどの（註・九尺餘）アムール種と思はれる大きな蛇が這ひ出してきた。老僧はその蛇を捕まへて祭壇に運び、佛像の手から肩へかけて蛇をのせた。蛇は佛陀の膝の上に丸くなつて、瞬きしない丸い眼でわれわれをじッと見ながら落著いてゐた。

「や、どうも！」

バボーシンはかう言つて人差指で蛇の頭を撫でた。「まつたく人間てやつは途方もないことを思ひつくもんだ！　毒蟲を馴らして、王大みたいに崇めてゐるんだね！」

老僧はわれわれに香りのいい支那茶をご馳走して、西藏から來た人々の手で十三世紀頃建てられたこの僧院の歴史や、百年前にこの島に渡つてきたこの神聖な蛇の歴史など、かい摘んで話した。

そして、龜の甲羅で拵へた魔除けをわれわれにくれて、道中の恙なさを祈りながら、チャオリウの瀧の方へ連れて行つてくれた。この瀧は湖から二十米も落下して、牡丹江の河水となるのである。

われわれは島を離れるや否や、空氣を震動させてゐる物凄い音にすつかり驚いてしまつた。その轟々たる響は、傍へ近づくにつれていよいよ烈しくなり、岸邊に出たときは、耳も聾するばかりで、お互の話し聲も聞き取れなかつた。流石のバボーシンの大聲も、すつかり水の音に消されてしまつて、わづかに唇の動きを見て、二三の言葉をそれと察することが出來た程度である。

鏡泊湖は、いはゆる綏衛湖の一種で、牡丹江の中流が、熔岩の流れで中斷されて出來たものである。

高さ二十メートルに及ぶこの熔岩の堰は、河の水準を高め、河水は岸から溢れて、大小の湖沼が散在してゐる六十露里の盆地へ流れ出で、この湖沼は牡丹江によつて連結されてゐるといふことになる。

堰の突出部の一つに、この土地の滿人たちが、廟を建てて瀧の神を祭つてゐる。

瀧の飛沫や水煙が、瀧の上まで柱のやうに立ち昇り、岸邊に茂つてゐる樹々や藪の中に沈潛して、これが小さな川となつて、低い方へ流れてゐる。

われわれは瀧のほとりで一日過したが、日暮までそこにゐて、篝で夜を明かすことにした。燐光を帶びてゐる月光に照らし出された薄緑の流や、沸きかへる泡は、まことに不思議な眺めであつた。われわれは疲れてはゐたが睡氣など飛んでしまつて、瀧の傍を離れることができなかつた。濕氣に濡れ、永遠の轟音で聾になつたわれわれは、瀧の息吹きに充たされた濕い空氣中でやうやく燃えてゐる焚火の傍に、魅入られたもののやうに一晩坐り通したのである。

われわれは話すことが出來ないので、合圖でお互ひの意志を通じた。眼の表情で十分理解し合つたのだ。

莫大な水量の落下のために、大地は地震のやうに震動してゐた。

冷たい瀧の流に身を浸したわれわれは、その壯大さと原始的な美しさとでわれわれを驚かせた素晴しい自然の繪卷物を思ひ浮べながら、朝早く北西の方角をさして、朗かに元氣よく出發したのであつた。

瀧から四五町離れて、やつと口を利くことが出來るやうになると、熔岩の由來、土壤の形成、火山の活動などについて、パボーシンが次ぎ次ぎに質問を發した。私は彼の好奇心を滿足させてやらねばならなかつた。熱心に耳を傾けてゐた彼はかう言つた。

「神のやることは立派なもんだなあ！　そんな奇蹟は地上にはないよ！　だが、どうも腑に落ちないのは、どろどろに熔けた熔岩がどうして地球の内部に保存されてゐるか、といふことだ」

私はそれに答へる譯に行かなかつた。といふのは丁度その時、斑點のある鹿の一群が樫林を出て、水飮みに行くところらしく、湖の方へ山の傾斜をくだつてゐたからだ。その數約十頭で、そのうちに大きな枝を持つた袋角のある鹿が三頭混つてゐた。仔鹿をつれた牝鹿が先で、牡鹿がそれにつづいた。

美しいこの動物は、身に迫る危險に氣もつかず、爪先立てて次ぎ次ぎに降りて行つた。

われわれは繁つた草叢に身を潛めて、腹這つたままでそれをじつと見戍つた。

彼我の距離は百歩を出なかつたが、風下にゐたせゐか、向ふではわれわれに氣が付かなかつた。

しかし、何か不安な氣持になつたらしく、細いきれぎれの叫び聲が牡の口から洩れて、一群

の鹿は忽ち立ち停まつて身動きもしなくなつた。

そのときバボーシンが發砲すると、鞭で叩くやうな音が響いて、近くの山峡に反響が轉つて行つた。

大きな袋角を持つた一匹の大きな牡鹿が後脚で立ち上つたと思ふと、よろよろとしてばつたり倒れた。他の鹿はみんなあわてて林の中へ駈け戻つた。灌木林の中で小さな白い布のやうなものがチラついたと思ふと、鹿の姿は見えなくなつた。

覘ひを定める間がなかつたのか、美しい鹿の姿に見惚れてゐたためか、とにかく私は撃たなかつた。

銃をあげて裝塡しながら、バボーシンはチラと私を見て言つた。

「どうして撃たなかつたんだ？」

私はその眼差に嘲笑と意地悪い皮肉を讀んだ。これが私の自尊心を傷けたので、かう言つてやつた。

「撃つ氣にもなれなかつたさ。ただ袋角を取るだけのために殺したかないからね！ いづれにしろ、肉は棄てることになるんだしさ！」

「まつたく君の言ふ通りだ！」バボーシンはかう言ひながらパイプに火をつけて、倒れた鹿の方へ近づいて行つた。

われわれの眼の前の草の上に、斑點のある美事な鹿が横はつてゐた。五つの枝に分れた大きな柔かい角は血に塗れてゐた。薔薇色の舌は齒の間からはみ出し、栗色の大きな美しい眼は、見開かれたままわれわれを非難するやうに見てゐた。

時間は速く過ぎ去つて、ぐづぐづしてはをれなかつた。われわれは腕まくりして鹿の臟腑を抜き、一時間半ぐらゐかかつて、額の骨から袋角を切り取り、毛皮を剝いで、肉を幾つにも斷ち切つた。

「おい、アキンヂン！」私は目の前に並んだ山のやうな肉塊を指さして、バボーシンを顧みた。「こいつを何うしようツていふんだ？ 五プード（註・二十餘貫）以上あるぜ！ 捨てなきやなるまい！」

「捨てるつもりは更にないんだぜ！」バボーシンはニヤリと笑つて私を見た。「無意味に獸を殺

しちやいかんと、君は言つたらう！　ところで、俺は肉を運ぶから、君は袋角を持つてつてくれ！」彼はかう言ふと、擴げてある毛皮に肉を包みはじめた。

「だが、そんな重いものを、四十露里近くもある小屋まで運ぶとなりア、そいつは事だぜ！」

私は友を納得させようとして言ひ添へた。

「運ぶのは、君でなく俺だよ！」袋に肉をくくり付けて擔はうとしてゐた彼が答へた。「俺のことは心配ご無用だ！　こいつだけでなく、もし重たけりや、袋角も持つてやつてもいいぜ」

われわれはこの邊で諍ひをやめて、間もなくちよつと腹拵へをしてから、歸途につき、牡丹江の盆地と海林河とを結びつける小道を辿りながら、だらだら坂を登つた。

嵩張つた重荷を背負つてゐたにも拘らず、バボーシンは、さり氣ない様子で先へ立つて歩き、ニヤリと笑ひながら袋角ごと自分の背におんぶされたらどうだ、と勸めた。

「どうだね君！」彼はパイプをふかしながら言つた。「疲れたらしいね？　俺の背にのつかつて休んだらどうだ？　俺は先へづんづん行くから。詰らんことで時間を潰すこともないからね！」

彼の我慢强さと膂力には私も驚いた。何しろ五プード（約二十二貫）以上もある重荷を擔いで、嶮しい山道を四十露里も休みなしに一氣に飛ばしたのだ！　私は半プードの重さの袋角を、やつとの思ひで運び、終り頃になると、へとへとに疲れてしまつた。

小屋に近づいた時分、私が疲れてゐるのを見てとつたバボーシンは、私が持つてゐた二挺の獵銃を持つてくれた。「おい君、その銃をこつちへ與れ。小屋へ辿りつかんうちに、ぶつ倒れるぜ！　もう少ししたら、君も引ッ擔いで行つてやらう！」密林の豪傑は黄色い丈夫さうな齒並を見せて人の好ささうな微笑を浮べて言つた。

小屋に著いたのは大分晩く、夜中ごろだつた。

ナスターシヤに世話を掛けないやうに、われわれは乾草置場に潜りこんで寢たが、何しろ非常に疲れてゐたし、湖の岸邊で一睡もせず、へとへとになつてゐたので、一晝夜近くぶつ通しに昏々と眠つたのである。

晩がた近く、匂ひのいい乾草の上で、好い氣持になつてゐたわれわれに呼びかけてゐるナスターシヤの響のいい聲が聞えた。

「まあ、惘れた人達だわ！　好い加減に起きたらどう？　薪ン中に入つたら嫌ッていふほど寢ら

れるんだから、もう起きて頂戴、食事だつて、とうの昔に冷えちまつたし、待ちくたびれたわ！」

中一日おいて、われわれは再び鹽地へ出かけて、夜明けまで見張つてゐたが、けだものは一匹も畏の傍に姿を見せず、山羊などは遠廻りしてわれわれを避けて通つたぐらゐで、年取つた牡山羊が山の向ふで吠え、ツヤオールが五六ぺん續けさまに啼いて默りこんだ。

「こんなこツだらうと思つたよ」バボーシンは横腹や背中をボリボリ掻きながら呟いた。『呪ふべき小動物』が這ひ込んだらしい。

「けだもの共は危險を悟つて逃げちまつたんだ！　牝虎が何處か、そこいらをうろうろしてゐるんだね！　他の鹽地へ行かなきや駄目だ！　ここぢや埒が明かんよ！」

われわれは空しく小屋に歸つて、乾草置場にナスターシヤが山盛りに殘して置いてくれた晩食を、片ツぱしから平げると、餘り忌々しくて、寢ちまへとばかり横になつた。

やつと眼が覺めたのは、かれこれ晝食時分で、寢てゐる間に烈しい驟雨が降り出したので、われわれはズブ濡れになつた。こいつは堪らないといふので小屋へ駈けこむと、丁度ナスターシヤが晝食の用意をすまして、ボーリカと虎の仔の兩兒に乳房を含ませてゐるところだつた。乳呑兒達は彼女の胸に身體を押しつけて、ぴちやぴちや音を立てながら貪るやうに乳を吸つてゐた。

母親は兩方の乳呑兒を、さもいとほしげに眺めてゐたが、その間に少しの區別もつけてゐないらしかつた。

私とバボーシンは、旨い肉入菜汁が冷え、溫かい肉饅頭に蠅がたかるのも忘れて、その樣子に見とれてゐた。

やがて、彼女の方でわれわれに注意を向けて、乳呑兒たちを覆髪頭布(プラトーク)で隱しながら、聲をかけた。

「阿呆みたいにぼんやり見てゐないでさつさと食べたらどう！　さめたツて二度と煖めちやあげませんよ」

その聲の調子ときたら、われわれが一言もなく食卓に向つてパクつき出したほどだつた。

『子供達』に乳を飲ませ終へると、ナスターシヤはそれぞれの場所に子供達を寢かしつけ、夜

中に寢たままで乳がやれるやうに、虎の仔のはひつた籠を自分の寢臺の傍に置いた。
　驟雨は歇んで、明るい光線が開け放した窓から射しこんだ。花咲く草木と大地の息吹きに充ちた香ぐはしくすがすがしい空氣が、小屋の内に流れこんだ。
　林に被はれたベイダヤンの裾が遙かに薄青く見え、半ば白い雲に隱れた大頭頂子の圓錐形の頂が空に聳えてゐた。
　われわれは庭へ出て、土塀に腰をおろした。眼の前には、いろいろの樹の混つた林の生ひ茂つた大きな海林河の盆地が展がり、遙か彼方の地平線上には、頂が雲に隱れてゐるベイダヤンの青い山腹が雨雲のやうに薄黑く見えた。
　われわれは神の世界の美しさを倦かず眺めてゐたが、お互ひに氣持が判つてゐたので、バボーシンが沈默に飽きるまでは、ながい間お互ひに無言だつた。
　バボーシンは、深い朝鮮松の林に覆はれた遠くの山々を指差して言つた。
「あれを見ろよ！　神、造物主が作つたものは實に素晴らしいぢやないか！　まさに地上の樂園ぢやないか！　浮世の煩はしさも、憎惡も虚僞も、此處までは屆かない！　ここにあるものは

凡て單純で、解り易く、汚れがない！　死そのものさへ恐ろしくはなく、生きるために必要なものは何でもある。ナスターシヤが町に住みたがらなかつたのは正しかつたよ。ここにゐると神に近く、身體のためにも精神のためにも好い。自分のことを言ふと、俺は此處にゐると、ウオツカを飲もうとも思はないが、町へ出て人混みにはひると、胸の下が苦しくなつて、飲屋に行きたくなるんだ！　これは何ういふ譯かと言ふと、人の居る處には、罪と誘惑があつて、蜘蛛が網を張るやうに惡魔が罠を仕掛け、われわれは蠅みたいに、それに引掛かるからなんだ！」
　バボーシンは、ややしばらく默つてゐたが、一服吸つてから言葉を續けた。
「いや、このバボーシンは浮浪人でルンペンではあるが、貧乏ぢやない！　バボーシンは金持で、豪勢なもんだ！　樹海は、彼の領地だ！　野獸は、彼の家畜だ！　彼に命令する者は一人もないし、頭を抑へる者もない！　彼の上にあるのは神だけで、彼バボーシンはその忠實な下僕さ！　彼は若い時代に露帝と祖國に仕へ、今は己れの額に汗してその日その日の麵麭を得てゐる。勤めたいとは更に思はない。一緒に狩獵に行つたことのある利權所有者のイワン・ドミートリエキツチ・ボボフが、密林で好い仕事を提供したが、俺は自分を束縛して、自分の自由

を賣り渡したくない。それは成るほど、ボボフ兄弟は立派な氣立のいい人物ではあるが、俺は自由な鳥で、好きなところへ飛んで行く！　俺は何處へ行くか判らん！　必要とあれば自分の領地へ出かけて家畜を捕つてくる。けだものを殺して、別に誰にも屆けなくたつていい。肉が要れば、猪を殺すし、金が要れば、袋角を持つた鹿や虎を殺す。だが、虎を殺すにしても、イギリス人や金持のアメリカ人のやうな遣り方はしない。象や獅子などは俺には要らん！　俺の助手、手傳ひは、頑健な足、忠實な手と、正確な眼だ！　俺の友人は、獵銃と短刀だ！　まつたくだよ君！」かう言つてパボーシンは靑く變つて行く山々に眼をやり、大きな聲で「ウォー」と叫んだ。

遠くの山々で遙かなこだまが、その叫び聲に應へ、獲物を探しながら小屋の上空を舞うてゐた鷲の啼聲が聞えた。

その叫び聲に鷄や鳩が吃驚するし、鵞鳥がガアガア鳴き出すし、馬繋木の側にゐた馬が耳を動かしながら不安さうに嘶いた。

この物音にナスターシヤが小屋の内から出てきて、つい鼻の先で兩手を擧げて大口を開いて

突つ立つてゐるパボーシンを見ると、いきなりふき出してしまつた。

「アキンチン！　あんた氣でも違つたの？　よくまあ、そんな途法もない聲が出せたものねえ？　口をしつかり閉めときなさい！」ナスターシヤはかう言ふと、手にしてゐた火掻き棒を振り上げた。

「撲れ、ナスチエンカ、撲つてくれ！　だが聞けよ」パボーシンは逞しい肩を突き出して靜かに言つた。「俺が大聲で吶鳴つたのは、氣が違つたからではなく、魂が躍つたからだ！　山も森も俺の聲に答へ、王大（ワンター）も唸り出すんだ！　ほら、聽いてごらん！」

實際遠くの山峽で、何か野獸の吠える聲がした。ことによると、さつきの驟雨で水嵩を增した河の奔流する音かも知れない。

「あんたは何處にでも王大（ワンター）が居るやうに思つてるのねえ！」ぱや小屋の入口にはひりかけたナスターシヤが、かう言つた。「氣をつけたがいいわ。王大が腹を立ててやつて來るかも分らないわ！」

すると、パボーシンは默りこんで何も言葉を返へさず、そのまま乾草置場へ立ち去つて、匂

ひのいい乾草の中へ潜りこんだ。

「まるで赤ン坊ですわ！」ナスターシャは私を振り返つて言つた。

「見かけはごつい大男だけど、實際は感じ易い優しい心を持つた人ですわねえ！」

私もそれに同感で、家禽を小屋へ追ひ込み、馬に飼料や水をやる時間になるまで、しばらく彼女と話しこんだ。

夕食がすむと、バボーシンは鹽地へ出掛ける用意をしたが、私に別れを告げてから言つた。

「ぢや左樣なら！　我等のパレスチナへちよいちよいやつて來いよ！　秋になつて鹿の啼く頃來いよ！」それから私の手を握つてから、坂を降りた。しばらくの間、宵闇の中で、彼のひよろ長い姿がちらちらしてゐた。

翌日私はナスターシャに別れを告げ、横道河子のある北を指して出發したのである。

野獸の夜

それから一年經つた。私は賜暇でロシアへ歸つたので、ゾートフの山小屋に住んでゐる人々の消息が少しも分らなかつた。

また春になつた。鈴蘭の花が咲いて、郭公が啼いた。夕燒のたびごとに、悲しげなツャオール（鳥の名）の唄が聞え、夜鷹は空に輪をゑがきながら、晝間の隱れ家を飛び出す夜蝶を追うた。

ある日、私が横道河子にある自分の家の内庭をぶらつきながら、麗かな春の夕を樂しんでゐると、街路から響いてくる雷のやうな友の聲が耳にはひつた。

「おい、鼻眼鏡！　こんちは！　久しぶりだなあ！」と塀を跨ぎながらバボーシンが喚いた。この男にとつては、塀などは無いと同じだつた。「俺はね、君はもう意氣地がなくなつて、密林に住む俺達のことなど忘れちまつたらうと思つてたよ。いや濟まん！　さあ、抱かしてくれ！」

バボーシンは熊のやうな恰好で私を抱いた。その時、安煙草の臭ひがぷんとし、それにも增して强い密林の樹脂の匂ひがした。

それから半時間の後、われわれは天井のないヴェランダでサモワルを圍みながら、和やかな

氣持で、ゾートフの小屋の生活や狩獵や、あの時の面白かつたことなど、それからそれへと話が盡きなかつた。

「いや、まつたくだ」彼はコーヒー皿で茶を啜りながら言つた。「あれから隨分月日が經つたなア！　いろいろ變つたが、肝腎なことは昔のままさ。變な風に思つちやいけないぜ。俺はまだ獨身だよ！〃ナスターシヤは結婚を先きへ先きへ延ばすんだ。結婚式はいつだつて擧げられる、と言つてね。何處かへ行つちまふと俺は脅かしたんだが、何と返事したと思ふ？〃行くなら行つたつていい、別に引留めやしないから。もしあたしを愛してるんなら、何處へも行かないだらうし、愛してないんだつたら、何處へでも好きなところへ行くがいい〃とかうなんだ！勿論俺は何處へも行かず、君も知つてゐる仲間のワーシカ・フルーシチエフと一緒に自分の小屋で暮してゐる。ゾートフの小屋は燒けちまつてね。俺とフルーシチエフと二人でナスチヤのために、大きな朝鮮松の丸太で新しい小屋を作つてやつたよ。今ぢや君、彼女の住家は、部屋が二つあつて臺所がついて、豪勢なもんだよ。大分賑やかになつてね。牝牛を買つたよ。何しろズメイカの乳だけぢや、小さな王（ワン）には足りなかつたからな。フルーシチエフは今片ッぽ手がないんだ。過去のことだが、熊に手を折られてね、腕に紫色の斑點が一ぱい出來たので、破傷風になつたなと判つたとき、思ひ切つて切斷しちまつたんだ。町の病院へ行くには遠いし、破傷風はもう肱まで來てゐるし、といつた譯で、奴さん大して思案もしないで、ペンナイフで切つて、骨は叩き折つてしまつた。傷口には相手の熊から採つた熊の脂を塗つといたが、それで結構癒つたよ！　今、片手で兩手同樣の仕事をしてゐるが、射撃なんかでも、射損じないやうに念を入れるんで、前より巧くなつたね。人間が自分で自分の腕を切斷するなんて、横道河子の醫者は、てんで信じないのさ！　あいつ、大した野郎だよ！　身體から言つても、氣性から言つても、まづ豪傑だね！　町でうようよしてゐる連中とは比べものにならんよ！　本當の密林の男だね！」

私はこのフルーシチエフを、まだ軍隊にゐる頃から知つてゐる。ザアムール州のある騎兵隊の好い下士だつた。

ウオロネジ縣の百姓出身の兩親は相當裕福に暮してゐたのだが、彼は除隊になると、そのまま滿洲に殘つて獵師になつたのだ。音樂が巧くて道化者の彼は、女の多い家庭では隨分もてた

ものだ。母親達は娘のために彼を追ひ廻したもんだが、本人はそれを煩がつて、友人バボーシンの住む密林へ逃げ込んだといふ譯である。

「アキンヂン！（註・バボーシンの名）そのフルーシチェフにナスターシャが惚れちまふ、といふ懸念はないかね？　あいつは何處へ出しても恥しくない男ッ振りで陽氣な男だ。女ッて奴は兎角かういふ男を好くもんだ。ナスターシャを取られないやうに氣をつけるんだな！　君はもう四十を過ぎてゐる、あいつは若い！　自分で判つてるだらうが、かういふ場合、若さといふものは大きな優先權だからね」

　私はかう言つてバボーシンの顏を瞶めた。はつきりと顏は見えなかつたが、穩かな顏色が落著きを失ひ、眼の色が怪しく光つた。そして彼は興奮を抑へてかう言つた。

「そんな馬鹿な。フルーシチェフは他人の女を横取りするやうな人間ぢやない！　それにナスターシャだつて、そんな輕薄な女ぢやない！　俺は自分を信じるやうに彼女を信じてゐる。ナスチャはしつかりしてゐる。そんなふしだらな眞似はしないよ！　君は彼女をよく知らないのだ！」

「無論僕が間違つてゐるかも知れない！」私は彼の肩に手をかけて言つた。「しかし、友人として自分の意見を述べ、萬一の不幸を慮つて警告することは、當然だと思ふ。なるほどナスターシャは立派な潔白な人だ。だが、自然の法則でやつが無視出來ないことは、君も知つてる通りだ。自然の法則は君を無視してちやんと實行されるだらう。何と言つても、自分の野菜畑へ山羊を入れたのは間違ひだよ！　君に苦勞をかけねばいいが、と思ふな！」

「おい君、何だつてそんな事を俺の耳に入れるんだ？」と言ふ彼の聲は震へを帶びてゐた。これから俺はそんなことを考へるやうになつて、人間を信じなくなるだらう！　無論君の言ふ通りだらうし、君の警告を有難く思つてはゐる。だが、どうすればいいんだ？　どうせ避けられない事ぢやないか！　俺は女の裏切りにはあまり馴れてゐない。何かそんな樣子が見えたら――俺はすぐ姿を隱すつもりだ！　だが、冗談ぢやない。俺だつて馬鹿ぢやない。さう簡單には欺されないぞ！」

「おい、さう興奮しなくてもいいぢやないか、バボーシン！」私は彼を宥めようとして言葉をつづけた。「僕が大袈裟に考へてゐるだけで、根も葉もないことかも知れないよ！　願はくは、

何もかも恙なく行つて、フルーシチエフも本當に立派な人間であることを見せてくれるやうに祈るよ！　だが、もうこの話は止して、外のことを話さうぢやないか。それよりあ、王大の倅、虎の仔はどうしてゐるか、話してくれないか？」

「どうもかうもないさ！」バボーシンはパイプに火を點けて答へた。「猪ぐらゐの大きさになつてね、もう乳も呑まないで、肉をやつてゐるよ。最初は鳩を獲つて來てやつたが、今ぢや山羊だ。をりをり獵に連れて行つて、獲物を捕ることを敎へ込んでゐる。山羊を襲ふのはもう上手になつたが、猪にはまだ齒が立たないね。まだ身體が小さいし、頭が働かないからだ。二三回獨りで森の中へ出かけて行つて、母親に出くわしたらしい。小屋へ母親を連れて來たことが一度あつたが、人間を恐れて小屋の內までは來なかつたよ。いづれ密林へ行つたきりになつて、牝虎が遠くへ連れて行つて了ふだらうがね。實に利口な奴だよ！　まるで犬みたいに從順で可愛らしい。ボーリカ（註・ナスターシヤの男の子）とすつかり仲よしでね、寢臺の上で抱き合つて寢てゐるよ。犬とも大の仲好しだ。ところが一つ困つたことには、犬が虎の足跡を跟けて行かなくなつた。仲好しの小さな王（ワン）の足跡だと思つてるんだね。ナスターシヤは自分の子みた

いに可愛がつてゐる。何しろ自分の乳で育てたんだからなア！　小さな王（ワン）の方でも母親のやうに甘えてゐるんだ」彼はかう言つて口を噤み、思ひに耽つた。どうやら密林のことを想つてゐるらしく、眼付が悲しげであつた。

私にはその譯が判つてゐたので、言はなければ宜かつた、と心ひそかに氣の毒に思つた。心の平靜を破られて、妬嫉と疑惑が、彼の心に忍びこんだのだ。この大きな赤ン坊は、すつかり氣持を傷けられて、足場を失つてしまつた。友人としてこいつは濟まぬことになつたぞと思つたが、後の祭でどうにも仕方がない。そこで、時間が經てば忘れるともなく忘れるだらうと、それを當てにして、それからこの話に觸れないことにした。

バボーシンの方でもこの問題に觸れず、ナスターシヤの名前を口にしないやうに努めた。私の言葉は彼の心の底まで驚かしたのだつた。

翌日、密林生活に必要な材料をいろいろ買ひ整へて、ロシア人獵師の言ふ、いはゆる『山』へ出發した。

暑い、むしむしした日だつた。汗が出た。われわれはゆつくり歩いたので、密江嶺の最後の

峠を越したときは、もはや日暮れ近かつた。

　山小屋まではまだ五露里も殘つてゐたが、われわれは谷川の岸邊に足を停めた。氷のやうに冷たく水晶のやうに透明な水が騒々しい音を立てながら、岩と岩との間を奔流してゐた。陽の光は殆ど射さなかつた。蔽ひかぶさるやうな崖の下、何百年も經つた朝鮮松の木蔭には、永遠の宵闇が立ちこめてゐた。鮮かな緑色の苔や、茂つた羊齒の枝には、エメラルドの滴のやうな露がキラキラ耀いてゐた。黴や茸の匂ひが漂うてゐた。

「ここは丁度好い休み場所だ！」バボーシンは密林用の袋を地べたにおろして言つた。「顔でも綺麗に洗つてからナスターシャの小屋へ行くとしよう。彼女はその方が好きだからなア！」

　われわれがすがすがしい流の水で顔を洗ひ終へないうちに、ハッとする物音が耳にはひつた。と、何ものかが嶮はしい岩壁を驅け降りて、川岸の藪や草むらを破つて急流の中へ飛びこんだ。後から砂礫がバラバラと崩れ落ちた。

　間もなや羊齒の藪から大きくて黒い牝熊が現はれ、無恰好な二匹の仔熊がそれに續いた。

　世話好きの母熊は、別に思案する風もなく仔熊を川の中へ抛りこみ、自分も腹の深さまで水にはひつて、泡立つ波を頭から被りながら、仔熊を洗ひ始めた。仔熊は嫌がつてきいきい叫んだり唸り聲をたてたりして、母熊の手から逃れて岸へ戻らうと一所懸命だつたが、母親に引き戻されて、また水の中へ抛りこまれるので、何もならなかつた。

　この水浴みは、仔熊たちが凍えて熱病やみのやうにがたがた震へ出すまで、かなり永く續いた。

　たうとう母熊は仔熊を岸邊に殘して、自分獨りで密林の唄を唸りながら、水の中に潛つたり氣持よささうに横になつたりした。仔熊達は母熊の監視がゆるんだのを勿怪の幸ひとふざけ合つたり駈け競べしたりしてゐた。

　われわれは、羊齒の枝に隱れた岸邊に身體を伏せて、じつと息をこらして、この密林の牧歌風景に見惚れた。

「あれこそ本當の生活だよ、君！　虚僞も欺瞞もない。すべてが有りのままの姿だ！」やがて私の友は煙草入れからパイプを取り出しながら膝を起して、かう言つた。

私が返事をする暇もないうちに、牝熊が不安さうに唸つたと思ふと、岸邊に飛び上つて、仔熊を川下の方へ追び立てたが、見る見るうちに藪の中に姿を消した。

一時間經つと、われわれは小屋に著いた。ナスターシャと子供だけがゐた。フルーシチェフは袋角取りに出て、居なかつた。支那人のツーマンは川でタイメンを釣つてゐた。

われわれを見ると、ナスターシャは子供を抱いたまま飛び出してきた。

「アキンヂン！」彼女は遠くから聲を掛けた。「今まで、何處に居たの？ みんな待ちくたびれて、淋しかつたわ！」

パボーシンは何も言はず、彼女と子供を抱いて、二人に強く接吻した。

「ほう、待ちくたびれたつて！」彼女は子供の手をとりながら言つた。

「まるで俺より好い人が目つからないやうに聞えるぜ！」パボーシンはかう言つて、探るやうな眼付で彼女を見た。

これには彼女もどぎまぎしたが、すぐ平靜に返つて言つた。

「いつも何かかんか變なことを考へ出すのねえ！ 今ンところ、あたしとこの子にとつて、あ

んたより他に好いものがあるものですか！」

それから彼女は私と挨拶を交はすと、パボーシンと腕を組んで、小屋の内へはひつて行つた。

二人きりの話を邪魔しては悪いと思つて、私はわざと獨り、庭に殘つた。

新しい小屋は、實際富裕な農家といつた印象をあたへた。高い柵に圍まれた廣い屋敷の中央に大きな丸太小屋が建つてゐて、樅ノ木で出來た附屬建物は、嚴疊でしつかりした造りだつた。庭では、鷄や鵞鳥や家鴨や豚がうろついてゐた。納屋には牝牛のブーレンカが立つたまま眠さうに口を動かしてゐた。鳩のクククといふ啼き聲や雌鷄の啼き聲が聞えた。家政が旨く行つてゐるところからくる落著きと滿足さが、一つ一つに現はれてゐた。柵の向ふに廣い野菜畑の畝が見えた。

太陽が沈んで夜の影が盆地一めんに横はる頃、私は小屋の内へはひつた。ナスターシャが食事の用意をしてゐるところだつた。彼女が食器の音をさせながら臺所で忙しい思ひをしてゐる間、私は子供を膝の上に載せて話をはじめた。子供は廻らぬ舌ながらもう口が利けた。片言ながら私に返事をしたが、私はその原始的な言葉が解らないので、パボーシンを煩はして通譯し

て貰はねばならなかつた。
「王(ワン)」といふ言葉が子供の口からたびたび出たが、これは自分の乳兄弟をかう呼んでゐたからだ。虎の仔は三日前に母親の牝虎と出て行つたまま、まだ歸つて來ないのである。
「恐らく二度と戻つて來ないだらう！」バボーシンは子供の鼻を拭きながら言つた。「その方が好いさ。養つて行くのがもう難しくなつたからね。だんだん猛獸になつて行く！　さうなると鎖で縛つたつて引き留める譯には行くまい！　ナスターシャとボーリカはちよつと淋しがるだらうが、やがて忘れるさ」
　夕食がすんで、子供を寢かしつけようとしたが、四つ足の仲良し『王(ワン)』と一緒に寢る癖がついてゐたので、『王(ワン)』の名を呼びながら、しばらくは駄々を捏ねてゐたが、間もなく泣き寢入りはしたものの、やはり無意識に小さな手で柔かい毛の生えた仲良しを手探りしてゐた。そこで母親が猫のワーシカを寢床の中に入れてやると、すぐ猫の頸を抱いて頭を押しつけて、すやすやと落著いた。猫は馴れてゐるとみえ、別に反抗もしなかつた。
　間もなくわれわれも横になつた。ナスターシャが臺所のペーチカの傍に寢床を拵へてくれた

が、つひ最近小屋の近くでバボーシンが殺した柔かい熊の皮の上にごろりとなると、溫かくて氣持が好かつた。
　あくる日は終日、私に釣りのコツを敎へたツーマンと一緒に川の急流でタイメン釣りで暮した。
　晝食のとき、獨得なシベリア式の方法で作られた珍しい味の魚汁が出た。
「旨いもんだな！」いい匂ひのする魚汁を頬ばつてバボーシンが言つた。「露帝(ツァー)だつてこんな旨い魚汁は祭日しきや食べない。それにしても、密林のタイメンは「とても手にはひるまいよ！」
　食事が終つた頃、フルーシチエフが歸つてきて、獲つた鹿の角を渡した。身體つきのすらりとした色白の美男で、空色の眼はやや出眼で、品のいい頭には赤味がかつた金髮が房々と生えてゐた。左の腕は無かつたが、別に醜い感じを與へず、かへつて全體の形に獨得の調子を添へてゐた。
　煮てくれと袋角をツーマンに渡すと、彼はわれわれに挨拶して、ナスターシャの手に接吻し

た。すると彼女は人参色に顔を赧らめて、突然立ち上ると臺所へ去つた。
私はパボーシンの顔を見た。彼はこの様子をすつかり見てゐて、心の動搖を抑へることが出來なかつた。フルーシチエフは座が白けたのに氣付いて、この氣拙い狀態から脫れようと、私の頼みを承知してギターの伴奏で何か歌ふことになつた。
子供を寢かしつけたナスチヤはギターを抱へて內庭へ出てきた。
彼女は絃の調子を整へると、パボーシンが持つてきた床几に腰かけて、ちよつと搔き鳴らした。なかなか上手だつた。ことにフルーシチエフが歌つた小唄やロシア民謠のモチーフは巧かつた。
フルーシチエフの力强い響きのいいバリトンは、その廣い胸の中から自由に輕やかに洩れ出て、高い調子に顫へながら、遠くの山峽へ消えていつた。
彼は戀と優しい情熱を歌つたが、その後でナスチヤの頼みで、グリゴーリイが好きだつた『夜の調べ』を心を籠めて歌つた。
われわれは息をこらして、じつと耳を傾けた。そしてうつとりとした氣分を毀すのを恐れ

て、鋸の齒のやうな峰から流れてくる微風に向つて、素晴しい聲を送り出してゐる恰好のいい片手の唄ひ手を、無言のまま見てゐた。
歌が終つたとき、われわれは美しい聲に聽きほれてゐたので、しばらくは我に還ることができなかつた。
最初にその沈默を破つたのはパボーシンだつた。彼は涙ぐんだ眼をして腰かけてゐるナスチヤを見、當惑して眼を伏せたまま立つてゐるフルーシチエフを見て、かう言つた。
「今こそ人生といふものが判つた！　何もかも判つた！」
かう言ふと、彼は例のパイプをふかして、ゆつくりと納屋の方へ歩いて行つた。納屋には袋角取りに行くに必要な品物が、手廻しよくすでに纏めてあつた。
それから永い間、彼は姿を見せなかつた。ナスターシヤは子供が眼を覺ましたのを聞きつけて小屋の內にはひり、フルーシチエフは素晴らしい伴奏のお禮を述べて、彼の袋角を煮てゐるツーマンの處へ足を向けた。
獨り殘された私は、小川の方へ歩いて行つて、道ばたの石に腰をおろし、暗い密林を背景に

飛び廻つてゐる螢を眺め、狭い巖の間を奔流する騒がしい波の音に耳を澄ました。

私の釣道具と餌が、この邊の藪の中に置いてあつた。私は釣竿を一本とり出して、一番流れの速い箇所に糸を投げこみ、タイメンを釣り始めた。すると、十分も經たないうちにかなり大きな魚が掛つた。それを掬ひ網に入れて再び糸を投げたが、もう食はなくなつた。水の流れに曳かれる浮標が一箇所で躍つて、早瀬の底へ沈んだ大魚を惹き寄せなくなつた。

山小屋の窓には灯がついて、犬に餌をやらうと呼んでゐるナスターシヤの聲が聞えてゐた。何處か遠くの山で、神秘な鳥ツヤオールが叫んだ。

私が釣竿に糸を卷いて歸らうとしてゐる時、袋と獵銃を兩肩に掛けたパボーシンが、こちらに近づいて來た。

「おい、何處へ行くんだ、パボーシン？」その袋に何やら一杯詰めこんであるのを見て私は訊ねた。

「鹽地へ行くんなら、何も袋を擔いで、荷物までぶらさげるには及ぶまい？」

「俺は遠くへ行くよ、君！」彼は何だか沁々した聲で言つた。「そして二度と歸つて來ない積り

だ！　俺は此處に居たつて仕様がないからなア！　君の言つた通りだ。俺の眼を開いてくれたことを君に感謝してゐる！　左様なら！　もう君とも會へないだらう！　この老いぼれの馬鹿者を惡く思はないでくれ。あの牝虎に、俺はあの女の邪魔をしたくないし、心から幸せを望んでゐると、さう傳へてくれ！　俺は孤獨な人間だつてことを、君は知つてゐる筈だな！　俺は立ち去らねばならんのだ！」

「ひどくまた狼狽てたもんだね、パボーシン！」私は引き留めようとして答へた。「これから何處へ行かうといふんだい。もう夜だぜ？」

「俺の行くところは、向ふだ！」宵暗の中で紺色に變つたベイダヤンの連山を遙かに指さした。

「あれが俺の國だ！　密林が俺を呼んでゐる。俺はあの密林を幸福の幻と取つ換へようとしたんだ！　左様なら！」彼はかう言ふと、私をしつかり抱いて接吻した。やがて私の傍を離れると、彼は川上の方へ山道を辿つて歩き出した。行く手はもはや夜の闇に沈んだ暗い朝鮮松の林である。背の高い彼の姿は、間もなく叢に隠れた。

私は小屋に歸つてみると、部屋の內が大へん活氣づいてゐるのに氣附いた。小さな王（ワン）がやつて來たのだ。虎の仔はナスターシヤの傍に立つて髭の生えた圓い頭を彼女の膝に擦りつけてゐた。ボリスは彼女の腕に抱かれてゐたが、幼友達の耳を引つぱらうと手を伸ばしながら「王！可愛い王！」と叫んでゐた。

私は戶口に立つたままこの光景をしみじみ眺め、ナスターシヤが自分の養子、迷子を心からいとほしげに愛撫してゐる樣子を、默つて視てゐた。

彼女は虎の仔に肉を食べさせ、櫛で毛を梳つてやり、息子と並べて寢かした。三十分も經つと、彼等は仲よく枕の上に頭を並べて抱き合つたまま眠つてしまつた。その光景は畫家の筆にとつて、まさに素晴しい題材であつた。

夕食がすむと、ナスターシヤは私に、ちよつと殘つてくれと賴んだ。

「ちよつとお話したいことがありますの！　ほんの四五分でいいんですから！」

われわれは土塀に腰をおろした。最初は何も言はなかつた。言ひたい事を頭の中で纏めてゐたらしい。やがて彼女が口を開いた。

「あたし、最近氣付き出したんですけど、あたしにだけでなく、一般にアキンチンの態度が目に見えて變つて來ましたの。以前は、いつもさうでしたけど、陽氣で快活で、冗談言ふのが好きな人でしたが、何時ごろからか、あたし氣が付きませんでしたが、何だか樣子が變つて參りましたの。いつも考へ込んで、暗い顏して、無口になつてねえ、それアあたしやボリスに對しては以前通り優しくしてはくれますけど。それが今解つたんですが、あの人はあたしの事でフルーシチエフにやきもちを燒いてるんですわ。ほんとに根も葉もないことなんですのに。フルーシチエフにしたつて嫉妬を燒かせるやうな眞似は何もしてないんです。それはフルーシチエフが好きなのは事實ですわ。ですけど、あの人の唄や話を聞くのが好きだ、といふだけのことですわ。アキンチンはあの人に對しても以前と變らず親しくしてはゐますけど。でねえ、あなたとは遠慮のない間柄ですから、あの、何かこの事で打ち明けた話でもしなかつたでせうかしら？」

かう言つてナスターシヤは、輝いてゐる大きな眼で私を凝ッと見つめた。その眼は月の光を受けて燐光を發してゐるやうな氣がした。

心の奥まで突き刺すやうなその眼差に、私は息苦しくなつて、あわてて答へた。

「いや別に何も聞いてませんが、袋角取りに出掛ける時、四五日かかる、事によると、それ以上も歸れない、と言ひ殘しては行きましたが」

「つまり、もう二度とあの人は歸つて來ない、とおつしやりたいんでせう？」彼女は興奮して疊みかけて訊ねた。

「僕の言葉がお判りになつてゐない！」私は冷靜を保たう、本當を悟られまい、と努めた。

「遠くへ行つて直ぐには歸れない、とあの男は言つたのです！」

「ああ、さうでしたの！」彼女はやつと聞き取れるぐらゐの聲で言つて、只ならぬ眼を暗い方へ向けた。「それですつかり判りました！　お禮申します！　お寢みなさい！」

かう言ふと彼女はすつくと立上つて、小屋の扉の蔭に姿を消した。

私はこの家庭ドラマに卷き込まれて、我とわが身を罵つたものの、どうにも仕方がなく、眼をつぶる外はなかつた。晩かれ早かれ、どうせ起ることが起つたのだ。バボーシンにしろナスターシヤにしろ、氣の毒には思つたが、力添へする譯には行かなかつた。いくら考へても、それだけの力を持つてゐなかつたのだ。

一ト晩ぢゆう牝虎が小屋の周圍を徘徊して、哀れつぽい聲で自分の仔を呼んでゐた。夜明けごろその叫び聲は歇んで、夜の密林の叫び聲も靜まつた。虎の仔は母虎と一緒に行つてしまつた。

薄暗い遠くの雲の中にベイダヤンの頂上が遙かに見える夜明けごろ、私は横道河子(ハンダオヘーズ)の自宅をさして出發した。

ゾートフの山小屋は、深い朝の眠りの中に沈んでゐた。

×

それから三年の月日がたつた。その時分私は石頭河子(シタオヘーズ)に住んでゐた。密林の男バボーシンの消息はその後ぱつたり絶えて、何處で何うしてゐるのか、誰も知らなかつた。いろんな噂はあつた。まさかと思はれるやうな噂や傳說めいた噂は時々あつたが、信じられる消息は一つもなかつた。

ある秋の一日のことであつた。私は一面坡驛(イーメンパ)で東へ行く汽車を待つ間のつれづれのあまり、

ロシア人部落をぶらついたことがある。ふと往來で小骨遊び（註・骨を並べてそれを倒す子供の遊戯）に興じてゐる一ト群の子供達を見掛けたが、その中に五つぐらゐに見える子供が、何だか見覺えがあるやうな氣がして、傍へ寄つてみた。

凝ッと視てゐるうちに、ゾートフの山小屋を思ひ出し、この子供がゾートフの子のボリスだといふことに氣が付いた。

で私は名前を呼んでみた。と、子供は立ち止つて、吃驚した眼で私を見た。

「坊やはこの小父さん覺えてないだらう？」黒みがかつた縮毛の頭を撫でながら訊ねた。

「うん、知らないや！」子供は悪びれず答へた。

「してママは何處にゐるんだね？」私は子供の手を執つて再び訊ねた。

「ママはすぐそこにゐるよ。あれが家だい！」子供は手に握つてゐた小骨をポケットに隠しながら言つた。

「ママんとこへ連れて行けるかい？」私は遊び仲間から離してから訊ねた。

「できるとも！　おいでよ！」子供は快く答へて先きに立つた。

われわれは一緒に歩き出したが、間もなく、硝子張りのヴェランダのついた大きな石造りの家の傍へ出た。ヴェランダには葉の艶々した古い無花果と、頭に羽の生えた棗椰子が見えた。

子供は正面の戸口へ私を引つぱつて行つて玄關へはひつた。

「ママ、ママ！」子供は大きな明るい食堂へ駈けこみながら叫んだ。

「ママをたづねてる小父ちやんを連れてきたよ！」

私は招じ入れられるのを待たずに子供の後について家の内にはひつた。

私の前に、密林の小屋で見たままのナスターシヤが立つてゐた。

「まあ、あなたでしたの！」彼女は注意深い眼差で私を見ながら、いつもの低い聲で言つた。

「まあ、どういふ風の吹き廻しで？　随分お久しぶりですこと……さ、どうぞお掛けください。主人は只今留守で、ハルピンまで一寸用がありまして。いま子供達相手に暮してますの。まあいいぢやありませんか。娘のオリョーチカを連れて參りますわ！」彼女はかう言つて何處かへ行つてしまつた。

私は周圍を見廻した。立派に飾り付けられたこの食堂の隣には、竪形ピアノを一隅に置いた

客間があつた。壁にはギターが提げてあり、その上に黒い額に欲つたグリゴーリイ・ゾートフの大きな肖像が掛つてゐた。

あらゆるものに豊さと好い趣味が見られた。

間もなく二歳になる女の子を兩手に抱いてナスターシヤが戻つて來た。赤ン坊は大きな青い眼で私を見てゐたが、私はその眼とブロンドの捲毛を見て、この子の父親は、ゾートフの山小屋で歌つた姿のいいフルーシチエフであることを、すぐ悟つた。

「あたしの良人が誰だか察しがついたでせう？」彼女はかう言ひながら娘を下へおろして、息子のボリスに預けた。ボリスは父親グリゴーリイそつくりの大きな濃い眼を私から離さず、その邊を駈け廻つてゐた。

子供達が向ふへ行つてから、われわれは客間にはひり、凭無長椅子に腰をおろした。

「さあ、これで誰も邪魔する者はありません！」彼女は事務的な調子で言つた。「きつとあなたは、パボーシンが居なくなつてから先きの出來事に興味を持つてらつしやるでせう？　かい摘まんで申上げますわ……

あの人はあれつきり密林から戻つて來ませんでした。何處にゐるのか存じません。もう死んだのぢやないかと思ひます。あたしは全く獨りぼつちになりました。父は亡くなるし、母は兄達と一緒にアムール鐵道の方へ行つてしまふし。であたしは山小屋を捨てて、母が小さな家を殘してくれた町へ移住しようと決心したのです。勿論小さな王は密林に殘りました。小屋に來る度數がだんだん少くなつて、やがてパッタリ來なくなつたのです。すつかり野性に返つて、母虎と一緒に遠くへ行つたのでせう。私とボリスは一時淋しい思ひをしましたが、そのうち馴れました……

それから間もなくフルーシチエフと一緒になりました。今あの人は鐵道關係の大きな請負仕事をやつてゐて、この一面坡で商賣を始めたのです。お蔭樣で仕事は旨く行つてゐます。擴張しようかと言つてるほどです。この家は自分の家で、經濟もなかなか大きいんですのよ。良人は丁度所用で先日ハルビンへ行きましたが、もし明日までいらつしたら、今晩歸る筈ですからお會ひ出來るんですけどねえ……」

「いや、殘念ですが、さうしては居れんので！」と私は時計を見ながら答へた。「汽車が出るま

で、もう一時間しかないのでね、急ぐんです。ところで僕が非常に興味を抱いてゐることを一つお訊ねしたいんですが、といふのは、どうしてあの自由な密林の生活と別れたか、あの生活に心を惹かれないかといふ點ですよ」

しばらく默つてゐたが、彼女は答へた。

「そのことについては、あたしも何べんとなく惱みました。魂の中を掘り返してみると、返らぬ美しい過去の名殘りを、今でも發見するのです。今も變らず密林を愛してゐるし、どうしても忘れる事が出來ないのです。バボーシンが居なくなつたら、あたしは山小屋を捨てねばならなかつたのです。あの人が居なければ、あたしに取つて密林の生活は無意味だからです。フルーシチエフも自然が好きで、密林に踏み止まるやうに言つてくれたのですが、これはあたしのためといふばかりでなく、つまり人を犧牲にしなければならぬと感じたので、勸告を退けたのです……」

フルーシチエフは働き好きの人で、活動的な仕事やキビキビした事業に心を惹かれてゐました。で、あたしはあの人のためでなく子供達のために自分を犧牲にしようと決心したのでした。

今のあたしは自分の身體ぢやありません。身近い人々に對する義務や責任があるのですから」

彼女はかう言つて口を噤み、庭から聞えてくる支那人勞働者の叫び聲に耳を傾けた。

彼女の指には、結婚指環の外に、匪賊の贈物なる蛙を彫つた金指環が光つてゐた。

この時、グリゴーリイの愛犬だつた年寄りのズメイカが、部屋の内にのそのそはひつてきた。そして己れの女主人の側へ寄ると、甘えて頭を彼女の膝に凭せかけた。

「ご覽の通り」とナスターシヤは忠實な犬の廣い額を撫でながら、言葉をついだ。「現在のあたしの生活は、昔の生活とは何一つ共通したものがありません。けれども、ときどき密林が堪らなく戀しくなつて、谷川の岸に立つてゐるあの山小屋や、遙かに聳える大頭頂子の頂や、幸福な日を送つたあの薄暗い神祕的な朝鮮松の林などを、一ト目見たい、といふ氣持になるんです……」

「失禮ですが、現在あなたは不幸だとおつしやるんですか？」私は相手の言葉を遮切つて思ひ切つた質問を發した。

彼女は、すぐには答へなかつた。この質問にはちよつと困つたらしい。やゝしばらく考へな

がらズメイカの額に接吻してゐたが、やがて答へた。

「今のご質問には面喰ひましたわ。でも、ざつくばらんに申し上げますと、人間は一生のうちで、たつた一度だけ幸福になれるものです。幸福は二度と訪れません。あたしが今幸せなのは自分が幸福だからでなく、良人や子供達が幸福だからなんです。あたしはこれにすつかり滿足し、生きる喜びを感じてゐます。あなたはパボーシンが最後に言つた「人生といふものが、今こそ判つた！」といふ言葉を憶えてらつしやるでせうが、あたしもこの言葉をそのまま、今やつと人生の意義が解つたと言へるでせう。パボーシンは何故だかあたしを牝虎と呼んでゐましたけど、今は牝虎どころか、ほんとに平凡な女、つまり平凡な母、主婦、看護女に變つてしまひました」

彼女は口を噤むと、片手で額をかくして、物思ひに沈んだ。むかしの追憶に耽り、ゾートフの山小屋へ、遙かに思ひを馳せてゐるところらしく思はれた。

彼女を現實に引き戻して、息苦しい沈默を拂ひ除けようとして、私はかう言つた。

「ナスチヤ、あなたが求めてゐたものを見出したので、私も喜んでゐるんですが、ここに一つ

私が興味を持つてゐることは、これはご主人にも關係のあることなんですが、それは將來どういふ事をやらうと思つてゐらつしやるんです？」

物思ひに沈んでゐた彼女は我に返つて、甘えてゐたズメイカの頸を抱きながら答へた。

「良人が馬橋河の密林の請負仕事をやらないかツて、ポポフ兄弟から勸められました。この人達はあの邊に大きな木材の利權を持つてるんですの。ご存知の通りこの會社は滿洲でもしつかりした會社の一つで、この人達は今時珍しい、殊に商人の中には見られないほどの正直な、立派な善良な人達ですの。良人は最近社長のアレキサンドル・ドミートリエウイチ・ポポフと近付きになつたのですが、その待遇と人の好さにすつかり惹きつけられましてね。あの人こそ本當のロシアの傑物で、優れた滿洲開拓者の一人だ、かういふ人と一緒に仕事するのは愉快で、將來が確實だ、といふんですの。この仕事のお蔭で私も密林へ出かけ、せめて遠くからでも眺めることが出來さうですわ……

まだ、あたしが山小屋に居た時分、ロジノフが發見した金鑛を見せてやると、パボーシンが約束したんですが、それつきりになつてしまひました。それが宜かつたか惡かつたかは判りませ

ん。その金鑛のお蔭でお金持になつたかも知れない、不幸になつたかも判りません。グリゴーリイもさうでしたが、パボーシンも黄金といふものを嫌つて、見向きもしなかつたものです。あの二人の言ふことにも尤もなところがあります。金鑛がなくつたつて、結構暮して居ますもの！……

こんどは外の話をいたしませう。お友達のミハイル・ミハイロウッチさんに久しくお目にかかりませんけど、今どうしてらつしやいますの？　あの人は少し變人でしたけど、ほんとに正直な上品な方でしたねえ。もしグリゴーリイの處へ行かず、あの人のお嫁さんになつてゐたら、あたしの生涯はすつかり別な風になつてたことでせうよ！」

かう言つてナスターシヤは口を噤んだが、表情に富んだ眼で私を凝視めながら返事を待つてゐた。

知らぬ間に時間が過ぎてゐた。私は線路の入れ替へをやつてゐる機關車の汽笛を耳にしながら、時計を覗き覗き、まるで針の蓆に坐つてゐる氣持だつた。そわそわした私の樣子を見て彼女は言つた。

「そんなにあわてなくたつて！　まだ時間はたつぷりありますよ。乘り遲れたッて大したことはないぢやありませんか、その方が却つていい位ですわ！　さうしたら、家に泊つて、良人が乘つて戻る汽車をお待ちになつたらいいんですから！」

「いや、ナスチヤ。ご主人とお會ひしたいのはやまやまですが、さうしても居れません。ところで、いつだかあなたに夢中だつたザゴールスキイの後日譚は、あなたに興味があるだらうと思ひますが、あの男は大分前からハルピンにすつかり根を下ろして家庭を持つて勤めてゐますよ。もう密林のことは忘れてしまつたでせう。私はハルピンへ出掛けた折たまに會ひました。自分の運命に滿足して幸せのやうです。といふのは、詩の文句で表現すると〃うつし世の波は破れし獨木舟を靜かなる岸べに押し流しぬ。よしや永遠ならずともしばしがほどは憩ふらむ〃といふ譯でね」

かう言ひながら私は腰をあげて、別れを告げ始めた。といふのは、發車する列車の最初の汽笛がはつきりと聞えたからだ。

ナスターシヤは何も答へず無言のままで、ただその暗い瞳が妖しく光つただけだつた。それ

は遠い密林の小屋に居た頃の牝虎ナスターシヤを私に憶ひ出させた。
「良人が歸るまでいらつしやらないのがほんとに殘念です！」出口で握手しながら彼女が言つた。
「あの人も屹度殘念がりますわ。どうしてお歸ししたんだッて、きつとあたし叱られますよ」
彼女の手に接吻したのはもう玄關口で、暗い大きな眼は悲しみを帶び、睫毛には涙が顫へてゐるのが私の眼についた。或ひは私の氣のせゐだつたかも判らない。
私が家の角を曲るまで、彼女は戸口に立つて見送つてゐた。そして訣れのしるしに片手を振つて姿を消した。
私がプラツトホームにはひつたとき、三番目の汽笛が鳴つて列車が動き出した。しかし、とにかく列車の昇降段に飛びつくことが出來た。一面坡驛はだんだん遠ざかり、列車はレールの上で轟々と音をたてながら、東へ東へと私を運んで行つた。

×

密林の奧の夜である。

『大林』のはづれ、綺麗な海林河が小止みなく騷いでゐるほとりに、獵師ツーマンの貧しい小屋があつた。薄暗い紙の窓は、闇の中で、一つ眼のやうにかがやいてゐた。低い沼澤地の上には、夜の小妖精である螢の群が、光つたり消えたりしながら飛んでゐた。濕り氣のある溫い空氣は、花や芽の香りに滿たされ、蛙の合唱が響き、夜鳥の聲が聞えた。
息苦しい小屋の內で、密林の老人は眠れなかつた。古びた骨は痛み、傷は疼き、衰へた胸は苦しげに呼吸し、老ぼれた心臟は激しく脈搏ち、遠い思ひ出は頭の中に蠢いてゐた。
ツーマンは煙管を吸ひながら小屋を出て、鋭い眼を闇に向けて耳を澄ました。鋭敏な聽覺は、はてと思はせる特殊の音を聞き逭さなかつた。
崩れかけたゾートフの山小屋が黑ずんでゐる邊りを、猛獸の長い影が地を這ふやうにして過ぎて行つた。これは密林の王者（註・虎のこと）であることを、ツーマン老人は知つてゐた。虎は幼時の思ひ出に惹かれ、憂愁のあまりそこへたびたびやつて來て、廢墟の中をうろつくのであるが、さういふ時愬へるやうな悲しい聲が聞えてくるのだつた。
昔のことを忘れかねた虎は、ツーマンの小屋へのそのそはひつてきて、甘えるやうに鼻聲を

出しながら、大きな逞しい頭を老人の膝に擦りつけることが、たびたびあつた。
年寄りの獵師は虎の頸筋を輕く叩いて、毛深い身體を撫でた。虎はざらざらした舌でかさかさした筋だらけの老人の手を舐めて、それに答へた。
をりをり、そのまま小屋から出て行かないで、煖かいオンドルの上で寢こんで了ふことがあつた。
そんな時老人は、寢る場所がないので、床に山羊の皮を敷いてその上に横になつた。
王は密林の中で人間に出會ふと、道を讓つて注意深く人間を見送るのだつた。人間の傍へ近寄らうとすると、人間の方では恐ろしい猛獸の一瞥に思はず危惧と疑惑を感じて、足を速めるのだつた。樹海の住人達は、王の生活についていろんなことを語り合つたが、中でもベイダヤンの奥の朝鮮松林の中で、バボーシンが王を連れてゐるのを目撃したと、斷言してゐた。
私はこんな噂が信じきれなかつたし、自分の友人の運命について何か具體的なことが知りたかつたので、東支鐵道沿線に住んでゐる彼の同郷人たちと會ふ機會を見逃さなかつたが、大抵は默つてゐるか、知らないと言ひ譯するかだつた。

ただ一人、バボーシンが自分の名付親と言つてゐた年寄のザバイカル・コザツクに會つた。
話が消息不明の山男に及ぶと、老人はかう言つた。
「バボーシンをわしは好く知つてゐる。徒らに姿を隱すやうな、そんな人間ぢやない。まして女のことが因でそんなことをする筈がない。密林は廣大だ。あいつは何處かに居るだらう。何も隱れることはないさ！　何處か遠くの大密林に住んでゐて、浮世とは緣を切つてるのだね！　あいつは誇りを持つてゐるからな！　わしら密林育ちは氣儘だよ。斧のはひらない密林と野獸の居るところは、何處でもわしらの住み家だ！」
かういふと老人は狡さうに微笑した。そして私を額越しに眺めて話をやめ、向ふへ行かうとした。
何だか物の言ひ方が可笑しいし、バボーシンの事を何か知つてゐて殊更隱してゐるらしく思へたので、私は老人の外套の袖口を抑へて、再び訊ねた。
「どうも何か隱してゐられるやうに思はれるが、私は彼の親友ぢやありませんか！　どうして本當の事を敎へてくれないのですか？」

老人は狡さうな眼付で私をチラと見て、嫌な煙草の臭ひをさせながら言つた。

「だが、それは無駄なこッた！　もしさう思はれるなら、思ひ直したがいい！　お前さんがあいつの仲良しだといふことは好く知つてゐる。だがお前さんはわし等の仲間ぢやない、密林育ちぢやないよ！　ざつくばらんに言ふとね、母なる密林は饒舌が嫌ひで沈默してゐるんだよ。わしはあいつを永いあひだ見ないし、何處にゐるのか知らない！　密林に訊いてごらん。わしよりは餘計に敎へてくれるかも判らん。さ、これでご免蒙りたいね、もう家へ歸るんだから！」

私はこの頑固おやぢを引留めずに歸した。

歸り際に老人は、髯の中で狡さうにニヤリと笑つて「左樣なら！」と言つた。

このザバイカル男の言葉は、私に想像の手掛りを與へ、バボーシンがながい間姿を見せないで佗びしい想念を起させたとは言へ、いつかは何處かに現はれるだらう、と私は信じたのである。多くの人々は彼を尊敬し愛してゐただけに哀惜の念をもつて彼のことを憶ひ出した。事情をよく知らない人々は、この密林の豪傑が身を滅したのはナスターシヤが原因だとして彼女の

せゐにしてゐる。

私は密林へ狩獵に出かけ、鐵道線路を遠く離れ、南の方へ奥深く踏みこみ、樹海の人跡稀な森林へはひり込んだのだが、つひにバボーシンの足跡を發見することができなかつた。

密林に住む人々は、バボーシンは禁獵御料林の中に住んで『朝鮮人參』取りをやつてゐると斷言したが、どうも信用がおけないので本當にしなかつた。

ある冬のことだつた。私は顏馴染の福蔡(フウファイ)老人の山小屋に泊るやうなことになつた。

老人は横になつて例の『忘却の煙草』を吸ひながら、かう言つた。

「今夜は『野獸の夜』でしてね！　ほら王大の聲が聞えるでがしよう！　ベイダヤンのてつぺんから此方に降りて來ますんで、そんときア、バボーシンも一緒でがすよ！」

その言葉に私は興味を感じて、半シューバを肩に引つかけると、小屋の外へ出た。

幽玄な月夜の靜寂の中で、何處か遠くの方から何頭かの野獸の聲が聞えてきた。その聲々は、雷鳴のやうに激しくなつたり、山峽深く消えたりしながら響いてゐた。

古い密林は持ち前の無愛想な唄を靜かに歌ひながら、野獸の咆哮を反復してゐた。その野獸

の咆哮の中に、バボーシンの力強い低音を思はせる人間の聲が交つてゐるやうな氣がした。

私は年寄りの獵師の言葉を思ひ出して、薄氣味の惡い神祕的な氣持になり、魅せられた者のやうに暗い林の端れに突つ立つてゐた。

空には鮮かな星がキラキラと輝き、大頭頂子の處女雪は仄に青い明りに照らされてゐた。『天を突く』モチヤン嶺の山脈は、遙か地平線の朧げな靄の中に消えてゐた。

原始的な自然は、この世ならぬ夢のやうな美しさを眼の前に展げてゐた。

やがて私が小屋に戻つたとき、年寄りの獵師はもう熟睡してゐた。

私は煖いオンドルの上に横になつてから、ながい間、粗野で壯大な密林の音樂に耳を澄ましてゐた。そして、うとうとと睡りに落ちながら「よう鼻眼鏡！ ほんとに久しぶりだつたなあ！」と言ふ友の姿を目の前に見たのである。

（完）

不許複製
禁無斷轉載

（出文協承認ア340376號）

牝虎　定價壹圓八拾錢 ㊫

昭和十八年一月二十日　初版印刷（五〇〇〇部）
昭和十八年一月二十五日　初版發行

發行所　滿洲日日新聞社東京支社出版部　東京市京橋區銀座西七ノ六　電話銀座(57)三六九五番
譯者　上脇進
發行者　中澤不二雄　東京市牛込區市ヶ谷藥町八番地
印刷所　成文堂　東京市芝區濱松町一ノ一三番地　東東一〇四九
印刷者　植田庄助　東京市芝區濱松町一ノ一三番地

日本出版文化協會會員番號　第一三二五一〇番

配給元　日本出版配給株式會社　東京市神田區淡路町二ノ九

2356

〝虎〟

H・バイコフ著
長谷川濬譯

定價一圓八十錢
送料二十錢

在滿唯一の白系露人作家H・バイコフの傑作で「牝虎」の姉妹篇である。北滿の大自然を背景とする動物文學の巨篇として全讀書界を驚嘆せしめた稀世の名作である。

著者自筆の北滿野生動物の生態を活寫した挿繪六十數葉を收め、「文と繪」によつて北滿の密林に咆哮する虎の生態を興味深く描きつくした。七十歲の老齡を以つて過般東亞文學者大會に來朝したバイコフの祕稿の公刊である

〝虎〟

〝虎〟

動物文學の先驅的名作!!

〝虎〟

發行所　滿洲日日新聞社出版部　（大連市東公園町31　振替大連6060番）

F83
B14
2

終